



対譯

法事勤行集



対
譯

法
事
勤
行
集

法事勤行集

目次

浄土真宗の教章	
大無量壽經	一
觀無量壽經	四〇
阿彌陀經	六七
讚 仏 偈	九八
正信念仏偈和讃	一〇二
五十六億和讃	一二五
御 文 章	一三三
法事の莊嚴作法	一四三
讚 仏 歌	一四五
重 誓 偈	一四八

浄土真宗の教章 (私の歩む道)

- しゅう めい じょう ど しん しゅう きょうしゅう
宗 名 浄土真宗
- しゅう そ かいさん しんらんしゅうにん
宗 祖 (ご開山) 親鸞 聖人 ご誕生 1173年5月21日(承安3年 4月1日)
ご往生 1263年1月16日(弘長2年11月28日)
- しゅう は じょうど しんしゅうほんがん じ は
宗 派 浄土真宗 本願寺派
- ほん ざん りゅうこくざん ほんがん じ
本 山 龍谷山 本願寺(西本願寺)
- ほん ぞん あ み だ に よ ら い な も あ み だ ぶ つ
本 尊 阿弥陀如来 (南無阿弥陀仏)
- せい てん しゃ か に よ ら い じょうどさん ぶきょう ぶつせつ むりょうじゅきょう
聖 典 ・ 釈迦如来が説かれた 浄土三部経『仏説無量寿経』
ぶつせつ かん むりょうじゅきょう ぶつせつ あ み だ きょう
『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』
- しゅう そ しんらんしゅうにん ちよじゅつ おも しょうぎょう しょうしんねん
・ 宗祖親鸞聖人が著述された主な聖教『正信念
ぶつ げ きょうぎょうしんしゅう ぎょうかん げもん じょうど わさん
仏偈』『教行信証』行巻末の偈文『浄土和讃』
こうそう わさん しょうぞうまつ わさん
『高僧和讃』『正像末和讃』
- ちゅうこう そ れんによしゅうにん ごぶんしょう
・ 中興の祖蓮如上人のお手紙『御文章』
- きょう ぎ あ み だ に よ ら い ほんがんりき しんじん ねんぶつ
教 義 阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を
申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき 浄土に生
まれて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。
- せい かつ しんらんしゅうにん あ み だ に よ ら い
生 活 親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来の み心
を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、
ざん ぎ かん ぎ げん せ きどう
慚愧と歓喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、
ごおんほうしゃ
御恩報謝の生活を送る。
- しゅう もん しゅうもん
宗 門 この 宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人
々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と
じ ひ じ た
慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに
こころゆた こうけん
心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

大無量壽經

先請伽陀

二打

同音

先

從觀不請
 仏音違彌
 乗勢弘陀
 華至願入
 来塵應道
 入沙時場
 一會衆迎

伽陀・三奉請の意義
 法要儀式が始まる前に、仏
 さまや菩薩さまに式場に降
 臨されることをお願いする
 ために読誦します。

まず阿弥陀仏が道場に入り給う
 ことをこい願う

因位の誓いに違わずして時に応
 じて迎えてくださる

観音勢至を始め多くの方々

如来に従って蓮の花に乗じてこ
 の会座に入られよ

大無量壽經

ぶつ せつ むりようじゆきよう

佛說無量壽經

三奉請・表白は六七頁

曹魏天竺三藏康僧鎧訳

曹魏三國志の魏（西暦一五〇年頃）
天竺インドの国
三藏經・律・論の仏典に精通した人
康僧鎧西地域出身の仏典翻訳家

同音

爾時世尊・諸根悦豫・姿色清淨・光

顏巍巍・尊者阿難・承佛聖旨・即從

座起・偏袒右肩・長跪合掌・而白佛

言・今日世尊・諸根悦予・姿色清淨・

光顏巍巍・如明淨鏡・影暢表裏・

威容顯曜・超絶無量・未曾瞻覩・殊

そのとき釈尊は喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、輝かしいお顔がひとときわ気高く見受けられた。そこで阿難は釈尊のお心を受けて座から立ち、衣の右肩を脱いで地にひざまづき、うやうやしく合掌して釈尊にお尋ねした。

「世尊、今日は喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、そして輝かしいお顔がひとときわ気高く見受けられます。まるでくもりのない鏡に映る姿が透きとおっているかのようでございます。そして、その神々しいお姿がこの上なく超えすぐれて輝いておいでになります。わたしは今日までこのような尊いお姿を見てまつたことがございません。そうです、世尊、私が思います

妙みよう如に今こん・唯ゆい然ねん大だい聖しょう・我が心しん念ねん言ごん・今こん日にち

世せ尊そん・住じゅう奇き特どく法ほう・今こん日にち世せ雄お・住じゅう佛ぶつ所しよ

住じゅう・今こん日にち世せ眼げん・住じゅう導どう師し行ぎよう・今こん日にち世せ英よう

・住じゅう最さい勝しょう道どう・今こん日にち天てん尊そん・行ぎよう如に來らい德とく・

去こ來らい現げん佛ぶつ・佛ぶつ佛ぶつ相そう念ねん・得とく無む今こん佛ぶつ・念ねん諸しよ

佛ぶつ耶や・何が故こ威い神じん・光こう光こう乃ない爾に・於お是ぜ世せ尊そん・

告ごう阿あ難なん曰わつ・云うん何が阿あ難なん・諸しよ天てん教きよう汝にょ・來らい問もん

佛ぶつ耶や・自じ以い慧え見けん・問もん威い顏げん乎こ・阿あ難なん白びやく佛ぶつ

大無量壽經

には、世尊は、今日、世の中でもっとも尊いものとして、特にすぐれた禪定に入っておいになりまます。また、煩惱を断ち悪魔を打ち負かす雄々しいものとして、仏のさとりの世界そのものに入っておいになります。また、迷いの世界を照らす智慧の眼として人々を導く徳をそなえておいになります。また、世の中でもっとも秀でたものとして、何よりもすぐれた智慧の境地に入っておいになります。そしてまた、すべての世界でもっとも尊いものとして、如来の徳を行じておいになります。過去・現在・未来の仏がたは、互いに念じあわれるということでありまます。今、世尊もまた、仏がたを念じておいになるに違いありません。そうでなければ、なぜ世尊のお姿がこのように神々しく輝いておいになるのでしょうか。」そこで釈尊は阿難に対して仰せになった。

・無有諸天・來教我者・自以所見・問
 斯義耳・佛言善哉阿難・所問甚快・發
 深智慧・眞妙辯才・愍念衆生・問斯
 慧義・如來以無蓋大悲・矜哀三界・所
 以出興於世・光闡道教・欲拯群萌・
 惠以眞實之利・無量億劫・難值難見・
 猶靈瑞華・時時乃出・今所問者・多所
 饒益・開化一切・諸天人民・阿難當知

「阿難よ、天人がそなたにそのような質問をさせたのか、それともそなた自身の考えから尋ねたのか」

阿難が答えている。

「天人が来て私にそうさせたのでなく、まったく自分の考えからこのことをお尋ねしたのでございます」

そこで釈尊は仰せになった。「よろしい、阿難よ、そなたの問いはたいへん結構である。そなたは深い智慧と巧みな弁舌の力で、人々を哀れむ心からこのすぐれた質問をしたのである。如來はこの上ない慈悲の心で迷いの世界をお哀れみになる。世にお出ましになるわけは、仏の教えを説き述べて人々を救い、まことの利益を恵みたいとお考えになるからである。このような仏のお出ましに会うことは、はかりしれない長い時を経て、もなかなかな難しいのであつて、ちやうど優曇華の咲くことがきわめてまれであるようなものである」

・如來正覺・其智難量・多所導御・慧

見無碍・無能遏絶・以一食之力・能住

壽命・億百千劫・無數無量・復過於

此・諸根悦予・不以毀損・姿色不變・光

顏無異・所以者何・如來定慧・究暢

無極・於一切法・而得自在・阿難諦聽

・今爲汝說・對曰唯然・願樂欲聞。

一打

る。だから、今そなたの間は大
きな利益をもたらすもので、す
べての天人や人々をみな真実の
道に入らせることができるので
ある。

阿難よ、知るがよい如來のさ
とりは、はかりしれない尊い智
慧をそなえ、人々を限りなく導
くのである。その智慧は実に自
在であり、何ものにもまたげ
られない。わずか一度の食事に
よつて限らない壽命をおもちに
なり、しかもよろこびに満ちあ
ふれ、お姿も清らかで、輝かし
いお顔も氣高く、少しもお変わ
りにならない。なぜなら如來は
禪定と智慧をどこまでもきわめ
尽くし、すべてを思いのままに
する力を得ておいでになるから
である。阿難よ、私はこれから
そなたのためにくわしく説くか
ら、よく聞くがよい」
阿難はお答えた。
「はい、喜んで聞かせていた
きます」

調聲

同音

南 な	南 な	南 な
無 も	無 も	無 も
阿 あ	阿 あ	阿 あ
弥 み	弥 み	弥 み
陀 だ	陀 だ	陀 だ
佛 ぶつ	佛 ぶつ	佛 ぶつ

南 な	南 な
	無 も
	阿 あ
	弥 み
	陀 だ
	佛 ぶつ

〔和讃〕

調聲

同音

未^み生^{しょう}世^せ尊^{そん}
 曾^{ぞう}希^け尊^{そん}者^{じゃ}
 見^{けん}有^うの阿^あ
 と心^{しん}威^い難^{なん}
 ぞと光^{こう}座^ざ
 あとおを^をより^り
 やしとろ瞻^{せん}た^た
 みかト仰^うち^ち
 ししトしト

《言葉の意味》

○尊者阿難：…釈尊十大弟子の一人。二十五年間の永きにわたり釈尊に仕え、説法を最も多く聞いた弟子であり、多聞第一の弟子といわれる。

○世尊：…世界中で最も尊い者、世間で尊重される者という意味で、お釈迦様のこと。

○威光：…けだかく光り輝くお姿。

○瞻仰：…うやまい、あおぎみること。

○生希有心：…仏の威光を見て、めったにない心が起ること。

○未曾見：…いまだかつて見たことがない。

○あやしみし：…不思議だと思ふこと。

調聲

同音

如來にょらいの光瑞こうずい希有きいうにして
 阿難あなんはなはだこころよく
 如是にょぜ之義しぎととへりしに
 出世しゅっせの本意ほんいあらはせり

《言葉の意味》

○如來……ここでは釈迦如來（お釈迦さま）をさす。

○光瑞……光り輝く奇瑞の相のこと。

○希有……超えすぎて比べるものがないこと。

○如是之義……「これほどうしたことですか」と理由をたずねた。

○出世の本意……お釈迦様がこの世に出現された本当の理由。

一打

調声同音

① 設せつ我得がとくぶつ・國こく有う地獄じごく・餓鬼がき畜生ちくしょう者しゃ

・不取ふしゅしょう正覺がく・

② 設せつ我得がとくぶつ・國こく中ちゅう人にん天てん・壽終じゅじゅう之後しご・

復更ふきよう三惡道さんまくどう者しゃ・不取ふしゅしょう正覺がく・

③ 設せつ我得がとくぶつ・國こく中ちゅう人にん天てん・不ふ悉しつ眞しん金こん色じき

者しゃ・不取ふしゅしょう正覺がく・

④ 設せつ我得がとくぶつ・國こく中ちゅう人にん天てん・形ぎよう色しき不ふ同どう・

有う好醜こうしゅう者しゃ・不取ふしゅしょう正覺がく・

① わたしが仏になるとき、わたしの國に地獄や餓鬼や畜生のものがいるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【無三惡趣の願】

② わたしが仏になるとき、わたしの國の天人や人々が命を終えた後、ふたたび地獄や餓鬼や畜生の世界に落ちる事があるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【不更惡趣の願】

③ わたしが仏になるとき、わたしの國の天人や人々がすべて金色に輝く身となることがないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【悉皆金色の願】

④ わたしが仏になるとき、わたしの國の天人や人々の姿かたちがまちまちで、美醜があるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【無有好醜の願】

⑤ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゅう}人^{にん}天^{てん}・不^ふ識^{しき}宿^{しゆく}命^{みよう}

・下^げ至^し不^ふ知^ち・百^{ひやく}千^{せん}億^{のく}・那^な由^ゆ他^た・諸^{しよ}劫^{こう}事^じ

者^{しや}・不^ふ取^{しゆく}正^{しよう}覺^{がく}・

⑤ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が宿命通を得ず、限りない過去のことでまで知り尽くすことができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【宿命通の願】

⑥ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゅう}人^{にん}天^{てん}・不^ふ得^{とく}天^{てん}眼^{げん}・

下^げ至^し不^ふ見^{けん}・百^{ひやく}千^{せん}億^{のく}・那^な由^ゆ他^た・諸^{しよ}佛^{ぶつ}國^{こく}

⑥ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が天眼通を得ず、数限りない仏がたの国々を見とおすことができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【天眼通の願】

者^{しや}・不^ふ取^{しゆく}正^{しよう}覺^{がく}・

⑦ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゅう}人^{にん}天^{てん}・不^ふ得^{とく}天^{てん}耳^に・

下^げ至^し聞^{もん}・百^{ひやく}千^{せん}億^{のく}・那^な由^ゆ他^た・諸^{しよ}佛^{ぶつ}所^{しよ}說^{せつ}・

⑦ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が天耳通を得ず、数限りない仏がたの説法を聞きとり、すべて記憶することができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【天耳通の願】

不^ふ悉^{しつ}受^{じゆ}持^じ者^{しゃ}・不^ふ取^{しゆ}正^{しやう}覺^{がく}・

⑧ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゆう}人^{にん}天^{てん}・不^ふ得^{とく}見^{けん}他^た心^{しん}

智^ち・下^げ至^し不^ふ知^ち・百^{ひやく}千^{せん}億^{のく}・那^な由^ゆ他^た・諸^{しよ}佛^{ぶつ}

國^{こく}中^{ちゆう}・衆^{しゆ}生^{じやう}心^{しん}念^{ねん}者^{しゃ}・不^ふ取^{しゆ}正^{しやう}覺^{がく}・

⑨ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゆう}人^{にん}天^{てん}・不^ふ得^{とく}神^{じん}足^{そく}・

於^お一^{いち}念^{ねん}頃^{きやう}・下^げ至^し不^ふ能^{のう}・超^{ちやう}過^か百^{ひやく}千^{せん}億^{のく}

・那^な由^ゆ他^た・諸^{しよ}佛^{ぶつ}國^{こく}者^{しゃ}・不^ふ取^{しゆ}正^{しやう}覺^{がく}・

⑩ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゆう}人^{にん}天^{てん}・若^{にやく}起^き想^{そう}念^{ねん}・

⑧ わたしが仏になるとき、わたしの國の天人や人々が他心通を得ず、数限りない仏がたの國々の人の心を知り尽くすことができないうなら、わたしは決してさとりを開きません。

【他心通の願】

⑨ わたしが仏になるとき、わたしの國の天人や人々が神足通を得ず、またたく間に数限りない仏がたの國々を飛びめぐることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【神足通の願】

⑩ わたしが仏になるとき、わたしの國の天人や人々が、いろいろ思ひはからい、その身に執着することがあるようなら、わ

貪計身者・不取正覺・

たしは決してさとりを開きません。

【漏尽通の願】

⑪ 設我得佛・國中天人・不住定聚

・必至滅度者・不取正覺・

⑪ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が、正定聚に入り、必ずさとりを得ることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【必至滅度の願】

⑫ 設我得佛・光明有能限量・下至

不照・百千億・那由他・諸佛國者・

⑫ わたしが仏になるとき、光明に限りがあつて、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【光明無量の願】

不取正覺・

⑬ 設我得佛・壽命有能限量・下至

百千億・那由他劫者・不取正覺・

⑬ わたしが仏になるとき、壽命に限りがあつて、はかり知れない遠い未来にでも尽きることはあるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【壽命無量の願】

⑭ 設我得佛・國中聲聞・有能計量

・下至三千大千世界・聲聞緣覺・於

百千劫・悉共計校・知其數者・不取

正覺・

⑮ 設我得佛・國中人人・壽命無能

限量・除其本願・修短自在・若不

爾者・不取正覺・

⑯ 設我得佛・國中人天・乃至聞有・

⑭ わたしが仏になるとき、わたしの国の声聞の数に限りがある、世界中のすべての声聞や縁覚が、長い間、力を合わせて計算して、その数を知ることができるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【声聞無量の願】

⑮ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々の寿命には限りがないでしょう。ただし、願によつてその長さを自由にしたいものは、その限りではありません。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【眷屬長寿の願】

⑯ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が、悪を表す言葉があるとしても耳にする

不善名者・不取正覺・

ようなら、わたしは決してさと
りを開きません。

【無諸不善の願】

⑬ 設我得佛・十方世界・無量諸佛・

不悉咨嗟・稱我名者・不取正覺・

⑬ わたしが仏になるとき、す
べての世界の数限りない仏がた
が、みなわたしの名をほめたた
えないようなら、わたしは決し
てさとりを開きません。

【諸仏称名の願】

⑭ 設我得佛・十方衆生・至心信樂・

⑭ わたしが仏になるとき、す
べての人々が心から信じて、わ
たしの国に生まれたいと願ひ、

欲生我國・乃至十念・若生者・

わすか十回でも念仏して、もし
生まれることができないようなら、

不取正覺・唯除五逆・誹謗正法・

わたしは決してさとりを開
きません。ただし、五逆の罪を
犯したり、仏の教えをそしるも
のだけは除かれます。

【念仏往生の願】

⑮ 設我得佛・十方衆生・發菩提心・

⑮ わたしが仏になるとき、す
べての人々がさとりを求める心
を起こして、さまざまな功德を

修諸功德・至心發願・欲生我國・臨

積み、心から私の国に生まれた

壽終時・假令不與・大衆圍繞・現

其人前者・不取正覺・

⑳ 設我得佛・十方衆生・聞我名號・

係念我國・植諸德本・至心回向・欲

生我國・不果遂者・不取正覺・

㉑ 設我得佛・國中人人・天・不悉成滿・

三十二大人相者・不取正覺・

㉒ 設我得佛・他方佛土・諸菩薩衆・來

いと思うなら命を終えようとするとき、わたしが多くの聖者たちとともにその人の前に現れましょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【至心発願の願】

㉔ わたしが仏になるとき、すべての人々がわたしの名を聞いて、この国に思いをめぐらし、さまざまな功德を積んで、心からその功德をもつてわたしの国に生まれたいと願うなら、その願いをきつと果たしとげさせましょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【至心回向の願】

㉕ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々がすべて、仏の身に備わる三十二種類のすぐれた特徴を欠けることなく、そなえないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【具三十二相の願】

㉖ わたしが仏になるとき、他の仏がたの国の菩薩たちがわた

生我國・究竟必至・一生補處・除
 其本願・自在所化・爲衆生故・被弘
 誓鎧・積累德本・度脱一切・遊諸佛
 國・修菩薩行・供養十方・諸佛如來・
 開化恒沙・無量衆生・使立無上・
 正眞之道・超出常倫・諸地之行・
 現前修習・普賢之德・若不爾者・不
 取正覺・

しの國に生まれてくれれば、必
 ず菩薩以上の位である一処補處
 の位に至るでしょう。ただし、
 その菩薩の願いによつてはその
 限りではありません。すなわち、
 人々を自由自在に導くため、固
 い決意に身を包んで多くの功德
 を積み、すべてのものを救い、
 さまざまな仏がたの國に行つて
 菩薩として修行し、それらすべ
 ての仏がたを供養し、ガンジス
 河の砂の数ほどの限らない人々
 を導いてこの上ないさとりを得
 させようとするものは別であつ
 て、菩薩の通常の各段階の行を
 超え出てその場かぎりでない慈
 悲行を実践することもできるの
 です。そうでなければ、わたし
 は決してさとりを開きません。

【還相回向の願】

②③ 設せつ我得がとく佛ぶつ・國こく中ちゆう菩ぼ薩さつ・承じゆう佛ぶつ神じん力りき・

供く養よう諸しよ佛ぶつ・一いつ食じき之し頃きよう・不ふ能のう遍へん至し・無む

数しゆ無む量りよう・那な由ゆ他た・諸しよ佛ぶつ國こく者しゃ・不ふ取しゆう正しよう

覺がく・

②④ 設せつ我得がとく佛ぶつ・國こく中ちゆう菩ぼ薩さつ・在ざい諸しよ佛ぶつ前ぜん・

現げん其ご德とく本ほん・諸しよ所しよ欲よく求ぐ・供く養よう之し具ぐ・若にやく

不ふ如に意い者しゃ・不ふ取しゆう正しよう覺がく・

②⑤ 設せつ我得がとく佛ぶつ・國こく中ちゆう菩ぼ薩さつ・不ふ能のう演えん說ぜつ・

②③ わたしが仏になるとき、わたしの國の菩薩が、わたしの不可思議な力を受けてさまざまな仏がたを供養するにあたり、一度食事をするほどの短い時間のうちに、それらの数限りない国々に至ることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【供養諸仏の願】

②④ わたしが仏になるとき、わたしの國の菩薩がさまざまな仏がたの前で功徳を積むにあたり、供養のための望の品を思いのままに得られないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【供具如意の願】

②⑤ わたしが仏になるとき、わたしの國の菩薩がこの上ない智慧について自由に説法することのできないようなら、わたしは

一切智者・不取正覺・

決してさとりを開きません。

【説一切智の願】

②⑥ 設我得佛・國中菩薩・不得金剛・

②⑥ わたしが仏になるとき、わたしの国の菩薩が金剛力士のようになら、わたしは決してさとりを開きません。

那羅延身者・不取正覺・

【得金剛身の願】

②⑦ 設我得佛・國中人天・一切萬物・

②⑦ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々の用いるものがすべて清らかで美しく、形も色も並ぶものがなく、きわめて優れていることは、とうていはかりしれないほどでしょう。かりに多くの人々が天眼通を得たとして、そのありさまを明らかに知り尽くすことができるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

無能稱量・其諸衆生・乃至逮得天
眼・有能明了・辯其名數者・不取

【万物嚴淨の願】

正覺・

②⑧ 設せつ我得がとくぶつ佛・國こくちゆう中ぼさつ菩薩・乃ない至少ししyouく功

德どくしや者・不能ふのうちけん知見・其ごどうじyouじゆ道場樹・無むりyouこう量光

色しき・高こう四し百ひやく萬まん里り者・不ふ取しyouがく正覺・

②⑨ 設せつ我得がとくぶつ佛・國こくちゆう中ぼさつ菩薩・若にやくじゆどくきyou受讀經

法ぽう・諷誦持說ふうじゆせつ・而にふとく不得・辯才智慧者べんさいちえしや・

不ふ取しyouがく正覺・

③⑩ 設せつ我得がとくぶつ佛・國こくちゆう中ぼさつ菩薩・智ちえべんさい慧辯才・

若にやくかげんりyouしや可ふ限しゆしyouがく量者・不取正覺・

②⑧ わたしが仏になるとき、私の国の菩薩で、たとえ功德の少ないものでも、わたしの国の菩提樹が限りなく光り輝き、四百万里の高さであることを知ることは決してさとりを開きません。

【見道場樹の願】

②⑨ わたしが仏になるとき、わたしの国の菩薩が教えを受け、口にとなえて心にたもち、人々に説き聞かせて、心のままに弁舌をふるう智慧を得られないようなら、わたしは決してさとを開きません。

【得弁才智の願】

③⑩ わたしが仏になるとき、わたしの国の菩薩が心のままに弁舌をふるう智慧に限りがあるようなら、わたしは決してさとを開きません。

【弁才無尽の願】

③① 設せつ我が得とく佛ぶつ・國こく土ど清しょう淨じよう・皆かい悉しつ照しょう見けん・

十じゅう方ぼう一いつ切さい・無む量りよう無む数しゆ・不ふ可か思し議ぎ・諸しよ

佛ぶつ世せ界かい・猶ゆ如に明み鏡きよう・觀と其ご面めん像ぞう・若にやく

不ふ爾に者しゃ・不ふ取しゆ正しょう覺がく・

③② 設せつ我が得とく佛ぶつ・自じ地ぢ以い上じよう・至し于う虛こ空くう・

宮くう殿でん樓ろう觀かん・池ち流る華け樹じゆ・國こく中ちゆう所しよ有う・一いつ

切さい萬まん物もつ・皆かい以い無む量りよう雜ざ寶ぼう・百ひやく千せん種じゆ香かう・

而に共ぐ合ごう成じよう・嚴げん飾じき奇き妙みよう・超ちよう諸しよ人にん天てん・

③① わたしが仏になるとき、国土は清らかであり、ちようどもりのない鏡に顔を映すように、すべての数限りない仏がたの世を照らし出して見ることができるとしよう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【国土清淨の願】

③② わたしが仏になるとき、大地から天空に至るまで宮殿・樓閣・水の流れ・樹々や美しい花など、わたしの国のすべてのものが、みな数限りない、いろいろな宝とさまざまな香りできている、その美しい飾られたようすは天人や人々の世界に越えずぐれ、その香りはすべての世界に広がり、これをかいた菩薩たちは、みな仏道に励むでしよ

其香普熏・十方世界・菩薩聞者・皆修

う。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【宝香合成の願】

佛行・若不如是者・不取正覺・

③③ 設我得佛・十方無量・不可思議・

諸佛世界・衆生之類・蒙我光明・触

其身者・身心柔軟・超過人天・若

不爾者・不取正覺・

【触光柔軟の願】

③④ 設我得佛・十方無量・不可思議・

諸佛世界・衆生之類・聞我名字・不

③④ わたしが仏になるとき、すべての数限りない仏がたの世界のものたちが、わたしの名を聞いて菩薩の無生法忍と、教えを記憶して決して忘れない力を得

得とく菩薩ぼさつ・無む生しょう法ぼう忍にん・諸しよ深じん總そう持じ者しゃ・不ふ

取しゅ正しょう覺がく・

③⑤ 設せつ我が得とく佛ぶつ・十じつ方ぼう無む量りょう・不ふ可か思し議ぎ・

諸しよ佛ぶつ世せ界かい・其ご有う女にょ人にん・聞もん我が名み字やう・飲かん

喜ぎ信しん樂ぎやう・發ほつ菩ぼ提だい心しん・厭えん惡の女にょ身しん・壽じゆ終じゆう

之し後ご・復ぶ爲い女にょ像ぞう者しゃ・不ふ取しゅ正しょう覺がく・

③⑥ 設せつ我が得とく佛ぶつ・十じつ方ぼう無む量りょう・不ふ可か思し議ぎ・

諸しよ佛ぶつ世せ界かい・諸しよ菩ぼ薩さつ衆しゆ・聞もん我が名み字やう・壽じゆ

られないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【聞名得忍の願】

③⑤ わたしが仏になるとき、すべての数限らない仏がたの世界の女性が、わたしの名を聞いて喜び信じ、さとりを求める心を起こし、女性であることをきらつたとして、命を終えて後にふたたび女性の身となるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【女人成仏の願】

③⑥ わたしが仏になるとき、すべての数限らない仏がたの世界の菩薩たちが、私の名を聞いて、命を終えて後に常に清らかな修行をして仏道を成しとげるでし

終じゆう之後しご・常修梵行じようしゆほんぎよう・至成佛道しじようぶつどう・若にやく

よう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【常修梵行の願】

不爾者ふにしゃ・不取正覺ふしゆしやうがく・

③⑦ 設せつ我得佛がとくぶつ・十方無量じつぽうむりよう・不可思議ふかしぎ・

諸佛世界しよぶつせかい・諸天人民しよてんにんみん・聞我名字もんがみようじ・五

體投地たいとうじ・稽首作禮けいしゆさらい・歡喜信樂かんぎしんぎよう・修菩

薩さつ行ぎよう・諸天世人しよてんせにん・莫不致敬まくだちきやう・若不にやくふ

爾者にしゃ・不取正覺ふしゆしやうがく・

③⑧ 設せつ我得佛がとくぶつ・國中こくちゆうにん・人天にんてん・欲得衣服よくとくえぶく・

③⑧ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が衣服を欲しいと思えば、思いのままに

③⑦ わたしが仏になるとき、すべての数限りない仏がたの世界の天人や人々が、わたしの名を聞いて、地に伏してうやうやしく礼拝し、喜び信じて菩薩の修行に励むなら、天の神々や世の人々はこのこらずみな敬うでしょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【人天致敬の願】

隨念ずいねん即至そくし・如佛によぶつ所讚しよさん・應法おうほう妙服みょうぶく・自じ

然在身ねんざいしん・若有裁縫にやくうさいぶ・擣染とうぜん浣濯かんじよく者しゃ・不ふ

取しゅ正覺しやうがく・

③⑨ 設せつ我得佛がとくぶつ・國中こくちゆう人天にんでん・所受快樂しよじゅけらく・

不如漏尽ふにょろじん・比丘者びくしゃ・不取正覺ふしゅしやうがく・

④⑩ 設せつ我得佛がとくぶつ・國中こくちゆう菩薩ぼさつ・隨意欲見ずいよくけん・

十方無量じつぽうむりやう・嚴淨佛土げんじやうぶつど・應時如願おうじにやがん・於お

寶樹中ほうじゅちゆう・皆悉照見かいしつしやうけん・猶如明鏡ゆにやみやうきやう・觀と

すぐ現れ、仏のお心になつた尊い衣服をおのずから身につけているでしよう。裁縫や染め直しや洗濯などをしなければならぬやうなら、わたしは決してさとりを開きません。

【衣服隨念の願】

③⑨ わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々の受ける樂しみが、すべての煩惱を断ち切つた修行僧と同じやうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【常受快樂の願】

④⑩ わたしが仏になるとき、わたしの国の菩薩が思ひのままにすべての数限りない清らかな仏の國々を見たいと思ふなら、いつでも願ひ通り、くもりのない鏡に顔を映すやうに、宝の樹々の中にそれらをすべて照らし出してはつきりと見る事ができるでしよう。そうでなければ、

其面像・若不爾者・不取正覺・

わたしは決してさとりを開きません。

【見諸仏土の願】

④① 設我得佛・他方國土・諸菩薩衆・聞

我名字・至于得佛・諸根闕陋・不具

④① わたしが仏になるとき、他の国の菩薩たちがわたしの名を聞いて、仏になるまでの間、その身に不自由なところがあるようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【諸根具足の願】

足者・不取正覺・

④② 設我得佛・他方國土・諸菩薩衆・聞

我名字・皆悉逮得・清淨解脫三昧

・住是三昧・一發意頃・供養無量・

不可思議・諸佛世尊・而不失定意・

④② わたしが仏になるとき、他の国の菩薩たちがわたしの名を聞けば、残らずみな清淨解脫三昧を得るでしょう。そしてこの三昧に入つて、またたく間に数限りない仏がたを供養し、しかも三昧のころを乱さないででしょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【住定見仏の願】

若にやく不ふ爾に者しや・不ふ取しゆ正しやう覺がく・

④③ 設せつ我が得とく佛ぶつ・他た方ほう國こく土ど・諸しよ菩ぼ薩さつ衆しゆ・聞もん

我が名み字じ・壽じゆ終じゆう之し後ご・生しやう尊そん貴き家け・若にやく

不ふ爾に者しや・不ふ取しゆ正しやう覺がく・

④④ 設せつ我が得とく佛ぶつ・他た方ほう國こく土ど・諸しよ菩ぼ薩さつ衆しゆ・聞もん

我が名み字じ・歡かん喜ぎ踊ゆ躍やく・修しゆ菩ぼ薩さつ行ぎやう・具ぐ足そく

德とく本ほん・若にやく不ふ爾に者しや・不ふ取しゆ正しやう覺がく・

④⑤ 設せつ我が得とく佛ぶつ・他た方ほう國こく土ど・諸しよ菩ぼ薩さつ衆しゆ・聞もん

④③ わたしが仏になるとき、他の国の菩薩たちがわたしの名を聞けば、命を終えて後、人々に尊ばれる家に生まれることができるでしょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【生尊貴家の願】

④④ わたしが仏になるとき、他の国の菩薩たちがわたしの名を聞けば、喜びいさんで菩薩の修行に励みさままの功德を欠けることなく身にそなえるでしょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【具足徳本の願】

④⑤ わたしが仏になるとき、他の国の菩薩たちがわたしの名を聞けば、残らずみな普等三昧を

我^が名^み字^{ようじ}・皆^{かい}悉^{しつ}逮^{たい}得^{とく}・普^ふ等^{とう}三^{さん}昧^{まい}・住^じ是^{いうぜ}

三^{さん}昧^{まい}・至^し于^う成^{じょう}佛^{ぶつ}・常^{じょう}見^{けん}無^む量^{りょう}・不^ふ可^か思^し

議^ぎ・一^{いつ}切^{さい}諸^{しよ}佛^{ぶつ}・若^{にやく}不^ふ爾^に者^{しや}・不^ふ取^{しゆ}正^{しょう}覺^{がく}・

④⑥ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・國^{こく}中^{ちゅう}菩^ぼ薩^{さつ}・隨^{ずい}其^こ志^し願^{がん}・所^{しよ}

欲^{よく}聞^{もん}法^{ぼう}・自^じ然^{ねん}得^{とく}聞^{もん}・若^{にやく}不^ふ爾^に者^{しや}・不^ふ取^{しゆ}

正^{しょう}覺^{がく}・

④⑦ 設^{せつ}我^が得^{とく}佛^{ぶつ}・他^た方^{ほう}國^{こく}土^ど・諸^{しよ}菩^ぼ薩^{さつ}衆^{しゆ}・聞^{もん}

我^が名^み字^{ようじ}・不^ふ即^{そく}得^{とく}至^し・不^ふ退^{たい}転^{てん}者^{しや}・不^ふ取^{しゆ}

得るでしよう。そしてこの三昧に入つて、仏になるまでの間に、常に数限りのないすべての仏がたを見たてまつることができでしよう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【住定見仏の願】

④⑥ わたしが仏になるとき、わたしの国の菩薩は、その願いのままに聞きたいと思う教えをおのずから聞くことができるでしよう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

【随意聞法の願】

④⑦ わたしが仏になるとき、他の国の菩薩たちがわたしの名を聞いて、ただちに不退転の位に至ることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【得不退転の願】

しょうがく

正覺・

④8 設せつ我が得とく佛ぶつ・他た方ほう國こく土ど・諸しよ菩ぼ薩さつ衆しゆ・聞もん

我が名み字ようじ・不ふ即そく得とく至し・第だい一いち・第だい二に・第だい三さん

法ほう忍にん・於お諸しよ佛ぶつ法ぽう・不ふ能のう即そく得とく・不ふ退たい轉てん者しゃ

・不ふ取しゆ正しょう覺がく。

一打

④8 わたしが仏になるとき、他の菩薩たちがわたしの名を聞いて、ただちに音響忍・柔順忍・無生法忍を得ることができず、さまざまな仏がたの教えにおいて不退轉の位に至ることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

【得三法忍の願】

調聲

南な無も阿あ弥み陀だん 佛ぶつ

南な無も阿あ弥み陀だん 佛ぶつ

一打

〔和讃〕
開聲
同音
 十方諸有の衆生は
 阿彌陀至徳の御名をきき
 眞實信心いたりなば
 おほきに所聞を慶喜せん

《言葉の意味》

○十方：十の方角の意で、東西南北とその間・上下を指す。

○諸有：諸々の有情としての生存。また迷えるものの存在の世界。

○衆生：衆多の生死をうけるものの意味で、生きとし生けるものすべてを指す。

○至徳：この上ない功德が十分に備わっている名号。

○きき：名号のいわれを聞いて疑いのないことを「きく」という。

○眞實信心：阿彌陀如来より衆生に与えられた本願力回向の信心。

○慶喜：慶とは信心を得てよろこぶ心。喜とは心のなかに常によるこびのたえないこと。

《言葉の意味》

○若不生者のちかひ：第十八願、念仏往生の願をさす。

○信樂：疑いなく信じ、よろこび願いもとめる意味で、他力信心をさす。

○ときいたり：心に信樂（信心）が生じたこと。

○一念：信心を獲得したそのはじめ、つまり阿弥陀仏の本願のいわれを聞きひらいた最初の時をいう。

○往生：阿弥陀仏の浄土に往き生れることをいう。

開聲
同音
 若^{にやく}不^ふ生^{しょう}者^{じや}のちかひゆへ
 信^{しん}樂^{ぎやう}まことにときいたり
 一^{いち}念^{ねん}慶^{きやう}喜^きするひとば
 往^{おう}生^{じやう}かならずさだまりぬ
一打

佛告阿難・其有衆生・生彼國者・皆

悉住於・正定之聚・所以者何・彼

佛國中・無諸邪聚・及不定聚・十

方恒沙・諸佛如來・皆共讚歎・無量

壽佛・威神功德・不可思議・諸有衆

生・聞其名號・信心歡喜・乃至一念

至心回向・願生彼國・即得往生・

住不退轉・唯除五逆・誹謗正法。

一打

大無量壽經

釈尊が阿難に仰せになった。さて、無量壽仏の國に生まれる人々はみな正定聚に入る。なぜなら、その國に邪定聚や不定聚のものはいないからである。すべての世界の數限りない仏がたは、みな同じく無量壽仏のはかり知ることのできないすぐれた功德をほめたたえておいでになる。無量壽仏の名を聞いて信じ喜び、わずか一回でも仏を念じて、心からその功德をもつて無量壽仏の國に生まれたいと願う人々は、みな往生することとができ、不退轉の位に至るのである。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗るものだけは除かれる。

佛ぶつ語ご彌み勒ろく・其同音有ごう得とく聞もん・彼ひ佛ぶつ名みょう號ごう・歎かん

喜ぎ踊ゆ躍やく・乃ない至し一いち念ねん・當とう知ち此し人にん・爲い得とく大だい

利り・則そく是ぜ具ぐ足そく・無む上じょう功く德どく・是ぜ故こ彌み勒ろく・

設せつ有う大だい火か・充じゅう滿まん三さん千せん・大だい千せん世せ界かい・要よう

當とう過か此し・聞もん是ぜ經きょう法ぼう・歎かん喜ぎ信しん樂ぎょう・受じゅ持じ

讀どく誦じゆ・如によ說せつ修しゆ行ぎょう・所しよ以い者しゃ何が・多た有う菩ぼ

薩さつ・欲よく聞もん此し經きょう・而に不ふ能のう得とく・若に有やく衆しゆ

釈尊が彌勒菩薩に仰せになる。
「無量壽仏の名を聞いて喜び満ちあふれ、わずか一回でも念仏すれば、この人は大きな利益を得ると知るがよい。すなわちこの上ない功德を身にそなえるのである。だから彌勒よ、たとえ世界中が火の海になったとしてもひるまずに進み、この教えを聞いて信じ喜び、心に保ち続けて口にとなえ、教えのままに修行するがよい。なぜならこの教えは、多くの菩薩たちがどれほど聞きたいと願つても、なかなか聞くことができないものだからである。もしこの教えを聞いたなら、この上ないさとりを開くまで決して後もどりすることはないであらう。だからそなたたちはひたすらこの教えを信じ、心にたもち続けて口にとなえ、

生・聞此經者・於無上道・終不退

教えのままに修行するがよい。」

転・是故應當・專心信受・持誦說行・

佛言吾今・爲諸衆生・說此經法・

令見無量壽佛・及其國土・一切所

有・所當爲者・皆可求之・無得以我・

滅度之後・復生疑惑・當來之世・經

道滅尽・我以慈悲哀愍・特留此經・

止住百歲・其有衆生・值斯經者・

釈尊が仰せになる。

「私が今、すべてのもののため
にこの教えを説き、さらに無量
寿仏とその國土の様子を残らず
見せた。この上にまだ尋ねたい
ことがあるなら、ためらうこと
なく問うがよい。わたしがこの
世を去った後に疑いを起こすよ
うなことがあつてはならない。
やがて将来、わたしがしめした
さまざまなさとりの道はみな
失われてしまうであろうが、私
が慈しみの心をもつて哀れみ、
特にこの教えだけをその後いつ
までもとどめておこう。そして
このお教えに出会うものは、み
な願いに応じて迷いの世界を離
れることができるだろう。」
釈尊が弥勒菩薩に仰せになった。
「如来がお出ましになった世に

隨意所願・皆可得度・佛語彌勒・如來

興世・難值難見・諸佛經道・難得難

聞・菩薩勝法・諸波羅蜜・得聞亦難・

遇善知識・聞法能行・此亦爲難・若

聞斯經・信樂受持・難中之難・無

過此難・是故我法・如是作・如是說・

如是教・應當信順・如法修行・

爾時世尊・說此經法・無量衆生・

生まれることは難しく、その如
来に会うことも難しい。また、
仏がたのお教えを聞くことも難
しい。菩薩のすぐれた教えや六
波羅蜜の行について聞くのも難
しく、善知識にあつて教えを聞
き、修行をすることもまた難し
い。ましてこの教えを聞き、信
じてたもち続けることはもつと
難しいことであつて、これより
難しいことは他にない。そうで
あるから、わたしはこのように
仏となり、さまざまなさとりへ
の道を示し、ついにこの無量寿
仏の教えを説くに至つたのであ
る。そなたたちは、ただこれを
信じてお教えのままに修行する
がよい。」

釈尊がこの教えお説きになると、
数限りない多くのものが、みな
この上ないさとりを求める心を

皆發無上・正覺之心・萬二千・那由

他人・得清淨法眼・二十二億・諸

天人民・得阿那含果・八十萬比丘・

漏尽意解・四十億菩薩・得不退轉・

以弘誓功德・而自莊嚴・於將來世・

當成正覺・爾時三千大千世界・六

種震動・大光普照・十方國土・百千

音樂・自然而作・無量妙華・紛紛而

起こした。一万二千那由他の人々が清らかな智慧の眼を得て、二十二億の天人やひとびとが阿那含果を得て、八十万の修行僧が煩惱を滅し尽くして阿羅漢のさとりに達し、四十億の菩薩が不退轉の位に至り、人々を救う誓いをたて、さまざまな功德を積んでその身にそなえ、やがて仏となるべき身となったのである。

そのとき、天も地もさまざまに打ち震え、大いなる光明は広くすべての国々を照らし、実にさまざまな音楽がおのずから奏でられ、数限りない美しい花があたり一面に降りそそいだ。釈尊がこのお教えを説き終わられると、弥勒菩薩をはじめ、さまざまな世界から来た菩薩た

大無量壽經

降・佛說經已・彌勒菩薩・及十方來

・諸菩薩衆・長老阿難・諸大聲聞・

ちや、阿難などの声聞の聖者たち、ならびにそこに集うその他すべてのものは、尊い教えを承つて、だれひとりとして心から喜ばないものはなかった。

一切大衆・聞佛所說・靡不歡喜。

佛說無量壽經

一打

調聲

南無阿彌陀佛

同音

南無阿彌陀佛

一^{いち}功^く歡^{かん}阿^あ彌^み攢^{さん}
 念^{ねん}德^{とく}喜^ぎ陀^た佛^{ぶつ}
 大^{だい}の^の讚^{さん}佛^{ぶつ}
 利^り實^{じつ}仰^うの^の
 无^むを^を御^み
 上^{じやう}具^ぐ名^な
 な^な足^{そく}を^を
 り^りして^{して}ば^ばき^き

同音

調聲

〔和〕

《言葉の意味》

○御名……南無阿弥陀仏の名号

○歡喜讚仰……よろこびほめ仰ぐこと。

○功德の宝……凡夫を往生せしめるすぐれた徳性。

○具足……十分に備わること。

○一念……信心を獲得したそのはじめ、つまり阿弥陀仏の本願のいわれを聞きひらいた最初の時をいう。

○大利無上……この上ないさとの境地。（救われるということ）

調聲

た と ひ 大 千 世 界 に

同音

み て ら ん 火 を も す ぎ ゆ き て

佛 の 御 名 を き く ひ と は

な が く 不 退 に か な ふ な り

《言葉の意味》

○大千世界：古代インドの宇宙観。須弥山を中心にして九山八海、四洲、日月などから構成されているとしてこれを一世界といひ、その一世界を千集めたものを小千世界、小千世界を千集めたものを大千世界、大千世界を千集めたものを大千世界と名づける。

○みてらん火：燃え上がる炎に満ちあふれること。

○すぎゆきて：通り越えること。

○不退：すでに得たさとりや功德、地位を決して失わないこと。

○かなふなり：決定しそこに住する。

往^{おう} 同^{どう} 平^{びやう} 願^{がん}
同音 調声

生^{じやう} 發^{はつ} 等^{どう} 以^い

安^{あん} 菩^ぼ 施^せ 此^こ

樂^{らく} 提^{だい} 一^{いつ} 功^く

三打 國^{こく} 心^{しん} 切^{せつ} 德^{とく}

〈読み方〉

願わくばこの功德を以て

平等に一切に施し

同じく菩提心をおこして

安樂國に往生せん

觀無量壽經

〔礼讃文〕

二打

われ今幸いに

まことの^{のり}み法を^き聞いて

限りなきいのちをたまわり

如来の^{だいひ}大悲に^{にち}いだかれて

安らかに^{やす}日々を^{にち}おくる

謹んで

深き^{ふか}めぐみを^{とうと}よろこび

尊き^{おし}み教えを^{おし}いただきまつらん

一打

佛説觀無量壽經

三奉請・表白は六七頁

宋元嘉中 曇良耶舍 訳

宋 中国南北朝時代の王朝

元嘉中 劉宋文帝の時代の年号

(紀元四三〇年頃)

曇良耶舍 西域出身の仏典翻訳家

同音

佛告阿難・及韋提希・諦聽諦聽・善

思念之・佛當爲汝・分別解說・除苦惱

法・汝等憶持・廣爲大衆・分別解說・

說是語時・無量壽佛・住立空中・

觀世音・大勢至・是二大士・侍立左右

釈尊は阿難と韋提希に仰せになつた。

「そなたたちは、わたしのいうことをよく聞いて、深く思いをめぐらすがよい。わたしは今そなたたちのために、苦悩を除く教えを説き示そう。そなたたちはしっかりと心にとどめ、多くの人々のために説きひろめるがよい」

釈尊のこのお言葉とともに、無量寿仏が突然空中に姿を現してお立ちになり、その左右には觀世音・大勢至の二菩薩がつきそつておられた。その光明はま

・光明熾盛・不可具見・百千閻浮檀

金色・不得爲比・時韋提希・見無量

壽佛已・接足作禮・白佛言世尊・我

今因佛力故・得見無量壽佛・及二

菩薩・未來衆生・當云何觀・無量壽

佛・及二菩薩・佛告韋提希・欲觀彼

佛者・當起想念・於七寶地上・作蓮

華想・令其蓮華・一一葉・作百寶色・

ばゆく輝いて、はつきりと見ることができない。黄金の輝きをどれほど集めても、そのまばゆさにはくらべようもなかった。ここに韋提希は、まのあたりに無量寿仏を見たてまつることができたので、釈尊の足をおしいただき、うやうやしく礼拝して申しあげた。

「世尊、わたしは今世尊の力によつて、無量寿仏と観世音・大勢至の二菩薩を拝ませていただくことができましたが、世尊が世を去れた後の世の人々は、どうすれば無量寿仏とその菩薩がたを見たてまつることができのでしょうか。」
そこで釈尊は韋提希に仰せになつた。

「韋提希よ、その仏を見たてまつりたいと思うなら、次のように思い描くがよい。」

まず七つの宝でできた大地の上に蓮の花があると思ひ、その蓮の花びらの一つ一つが百の宝

有八萬四千脈・猶如天画・脈有八萬

四千光・了了分明・皆令得見・華

葉小者・縱廣二百五十由旬・如

是蓮華・有八萬四千葉・一一葉間・各

有百億・摩尼珠王・以爲映飾・一一摩

尼・放千光明・其光如蓋・七寶合成・

遍覆地上・釋迦毘楞伽寶・以爲其臺

・此蓮華臺・八萬金剛・甄叔迦寶・梵

の色を持つていると想い描くのである。その花びらには八万四千のすじがあつて、まるで天の美しい絵のようである。またそのすじは、それぞれ八万四千の光に輝いている。それらが一つ一つはつきりと見えるようにするがよい。花びらは小さいものでも大きさが二百五十由旬はある。この蓮の花には、このような花びらが八万四千もあるのである。その花びらと花びらの間にはそれぞれ百億の宝玉で飾られていて、それぞれの宝玉は千の光明を放っている。その光明はまるで七の宝でできた天蓋のように広く地上をおおっている。蓮の花の芯は釈迦毘楞伽宝でできた台座となつており、さらにそれが八万の金剛宝・甄叔迦宝・梵摩尼宝や美しい真珠の網でいろいろに飾られている。

摩尼寶・妙眞珠網・以爲交飾・於其

臺上・自然而有・四柱寶幢・一一寶

幢・如百千萬億・須彌山・幢上寶幔・

如夜摩天宮・有五百億・微妙寶珠・

以爲映飾・一一寶珠・有八萬四千光・

一一光・作八萬四千・異種金色・一一

金色・遍其寶土・處處變化・各作異相・

或爲金剛臺・或作眞珠網・或作雜華

そしてその台座の上には四本の宝柱があり、それぞれの宝柱は百千万億の須彌山を重ねたように高く、宝柱の上の幔幕はちやうど夜摩天の宮殿のようであり、五百億もの美しい宝玉で飾られている。

それぞれの宝玉には八万四千の光があり、その光はそれぞれ八万四千の異なった金色に輝き、さらにそれらの金色の輝きが広く宝の大地に満ちわたり、いたるところでさまざまな姿となる。すなわち金剛の台ともなり、眞珠の網ともなり、あるいは色とりどりの花の雲ともなるというように、いたるところで見られるの思うままの姿をとり、仏のすぐれたはたらきをあらわして

雲・於十方うん おじつほうめん・隨意ずい い變現へんげん・施作し さ佛事ぶつじ・

是爲ぜ い華座けざ想そう・名み第七だいしち觀かん・佛告ぶつごう阿難あなん・如にょ

此し妙華みょうげ・是本ぜほん法藏ほうぞう比丘びく・願力がんりき所成しよじょう・

若にやく欲念よくねん彼佛びぶつ者しや・當先とうせん作さ此華座けざ想そう・作さ

此想しそう時じ・不得ふとく雜觀ざつかん・皆應かいおう一一いちいち觀之かんし・一いち

一葉いちよう・一一いちいち珠しゆ・一一いちいち光こう・一一いちいち臺だい・一一いちいち

幢どう・皆令かいりよう分明ふんみよう・如にょ於鏡おきよう中ちゆう・自見じけん面めん

像ぞう・此想しそう成者じやうしや・滅除めつじよ五萬劫ごまんごう・生死しやうじ之し

いる。このように思い描くのを華座相といい、第七の觀と名づける」

さらに釈尊が阿難に仰せになつた。

「阿難よ、このすばらしい花は、もともと法藏菩薩の本願の力によつてできあがつたものである。もしその仏を思い描こうとするなら、まずこの蓮の台座を想いを描く觀を行うがよい。ただしこの觀を行うときには、けつして雑然と想い描いてはならない。その花びら、宝玉、光、台座、宝柱をそれぞれ一つ一つを正しく想い描いて、ちようど鏡に自分の顔かたちを映し見るように、それらをみなはっきりと想うがよい。

この觀が成就したなら、五万劫という長い間の迷いのもとである罪が消えて、必ず極樂世界

觀無量壽經

罪・必定當生・極樂世界・作是觀者・

名爲正觀・若他觀者・名爲邪觀。

に生まれることができる。このように観ずることを正觀といい、そうでないならすべて邪觀というのである」

一打

調聲

同音

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

〔和讃〕

開聲

同音

罪障おもしとなげかざれ
生死大海の船筏なり
智眼くらしとかなしむな
无明長夜の燈炬なり

《言葉の意味》

○無明……真理に暗く、道理事を明らかに理解できない精神状態をいう。最も根本的な煩惱。迷いの根源。

○長夜……迷いの闇が長く深いことをたとえている。

○灯炬……たえず私を照らすみ光。

○智眼くらし……智慧の眼が開けていないこと。

○生死大海……生老病死の苦しみと欲望煩惱で悩み迷っている人生をたとえる。

○船筏……弥陀の本願をふね・いかだにたとえる。

○罪障おもし……地獄に堕ちる行いばかりしているすがた。

願摩

同音

散^{さん} 亂^{らん} 放^{ほう} 逸^{いつ} も す て ら れ ず
 佛^{ぶつ} 智^ち 无^む 邊^{へん} に ま し ま せ ば
 罪^{ざい} 業^{ごう} 深^{じん} 重^{じゅう} も お も か ら ず
 願^{がん} 力^{りき} 无^む 窮^{きゆう} に ま し ま せ ば

一打

《言葉の意味》

○願力……弥陀の本願の働き。

○無窮……限界がないこと。

○罪業……道理にそむき禁断をおかし、そのため苦の報いを招く行為。

○仏智無辺……弥陀の智慧が広大であることをしめす。

○散乱放逸……心が散り乱れ、自らの心を制御できず、悪いことを行うもの。

同音
ぶつごう あなん ぎゆう いだい け し そうじよう い し
佛告阿難・及韋提希・此想成已・次

さらに釈尊は阿難と韋提希に仰せになった。

とうきよう かん むりようじゆぶつ しんそうこうみよう あなん
當更觀・無量壽佛・身相光明・阿難

とうち むりようじゆぶつしん によひやくせんまんのく や
當知・無量壽佛身・如百千萬億・夜

まてん えん ぶだんごんじき ぶつしんこう ろくじゅうまんのく
摩天・閻浮檀金色・佛身高・六十萬億

なゆた ごうがしやゆじゆん みけんびやくごう う
・那由他・恒河沙由旬・眉間白毫・右

せんえんでん によごしゆみせん ぶつげんによしだい かいすい
旋婉轉・如五須彌山・佛眼如四大海水

しやうびやくふんみよう しんしよもうく えんすいこうみよう
・青白分明・身諸毛孔・演出光明・

によしゆみせん ひ ぶつえんこう によひやくおく さんぜんだい
如須彌山・彼佛圓光・如百億・三千大

またお体の毛穴から放たれる光明はまるで須彌山のように大きく、その頭の後ろにある円光の広さは百億の三千大千世界をあわせたほどである。その円

また眉間の白毫は右にゆるやかにめぐり、その大きさはちょうど須彌山を五つあわせたほどであって、その目は四大海水のようにひろびろとしており、清らかに澄みきっている。

「この觀が成就したなら、次に無量壽仏の眞の姿と光明を想い描くがよい、阿難よ、よく知るがよい。無量壽仏のお体は百千萬億の夜摩天の黄金のようにまばゆく輝き、その高さは六十万億那由他恒河沙由旬である。」

千世界・於圓光中・有百萬億・那由

他・恒河沙化佛・一一化佛・亦有衆多

・無數化菩薩・以爲侍者・無量壽佛・

有八萬四千相・一一相・各有八萬四

千・隨形好・一一好・復有八萬四千光

明・一一光明・遍照十方世界・念佛

衆生・攝取不捨・其光明相好・及與

化佛・不可具說・但當憶想・令心眼見

光の中には百万億那由他恒河沙の化身の仏がおいでになり、それぞれの化身の仏にはまた数限りない化身の菩薩がつきそつて

また、無量壽仏のお体には八万四千のすぐれたところがあり、そのそれぞれにはまた八万四千のこまかな特徴がそなわつてゐる。さらにそれぞれにまた八万四千の光明があり、その一つ一つの光明は広くすべての世界を照らして、仏を念じる人々を残らずその中に摂め取り、お捨てになることがないのである。

その光明やお体の特徴、そして化身の仏について詳しく説くことはとてもできない。ただ思いをこらし、心の眼を開いて明らかに見るがよい。

・見けん此事じ者しゃ・即そく見けん十方じつぼう・一切いっさい諸佛しよぶつ・以い

見けん諸佛しよぶつ故こ・名みょう念佛ねんぶつ三昧さんまい・作さ是ぜ觀者かんしゃ・

名みょう觀かん一切いっさい佛身ぶつしん・以い觀佛身かんぶつしん故こ・亦やく見佛けんぶつ

心しん・佛心ぶつしん者しゃ・大慈だいじ悲ひ是ぜ・以い無緣むえん慈じ・撰せん諸

衆生しゅじょう・作さ此觀者かんしゃ・捨身しゃしん他世たせ・生しょう諸佛しよぶつ

前ぜん・得とく無生むしやう忍にん・是ぜ故智こち者しゃ・應おう當とう繫心けしん・

諦觀たいかん無量むりやう壽佛じゆぶつ・觀かん無量むりやう壽佛じゆぶつ者しゃ・從じゅう

一相いちそう好入ごうにゅう・但觀たんかん眉間みけん白毫びやくごう・極令ごくりやう明みやう

觀無量壽經

このように想い描くものは、さまざまな世界の仏がたをすべて見たてまつることになる。すべての仏がたを見たてまつるのであるから、この觀を念仏三昧と名づける。また、この觀を行えばすべての仏のおすがたを想い描くことになり、仏の姿を想い描くのであるから、仏の心を見たてまつることになる。その仏の心は大いなる慈悲の心であり、このわけへだてのない慈悲をもつて、仏はすべての人々を撰め取られるのである。

この觀が成就すれば、来世には仏がたの前に生まれ、無生法忍を得ることが出来る。だから智慧の優れたものは心を一つにして、はつきりと無量壽仏を想い描くがよい。そして無量壽仏を想い描こうとするものは、その仏の特徴の一つを想い描くことから始めるがよい。それにはまず眉間の白毫をきわめてはつきりと想い描くことである。眉

了・見眉間白毫者・八萬四千相好・

自然當現・見無量壽佛者・即見十方・

無量諸佛・得見無量諸佛故・諸佛現

前授記・是爲遍觀・一切色身想・名第

九觀・作此觀者・名爲正觀・若他觀

者・名爲邪觀。

一打

間の白毫を想い描くなら、八万四千のすぐれた特徴を持つおすがたがおのずから現れてくる。こうして無量寿仏を見たてまつるなら、それはすなわち様々な世界の数限りない仏がたを見たとまつることになる。さまたまな仏がたを見たてまつることによつて、仏がたは目の前でさとりを得ることを約束してくださるのであらう。このように想い描くのをひろくすべての仏のおすがたを想い描く相といい、第九の観と名づける。このように観ずることを正観といい、そうでないならすべて邪観というのである。」

同音

調聲

南 な	南 な	南 な
無 も	無 も	無 も
阿 あ	阿 あ	阿 あ
弥 み	弥 み	弥 み
陀 だん	陀 だん	陀 だん
佛 ぶつ	佛 ぶつ	佛 ぶつ

南 な	南 な
	無 も
	阿 あ
	弥 み
	陀 だん
	佛 ぶつ

〔和讃〕

調聲

同音

願力成就の報土には
 自力の心行いたらねば
 大小聖人みなながら
 如来の弘誓に乗ずなり

《言葉の意味》

○願力成就の報土……阿彌陀仏の浄土。

○自力の心行……自らの心を正しいとして行う仏道修行。

○いたらねば……至ることが出来ない。

○大小聖人……大乘、小乗の聖人のこと。

○如来……阿彌陀仏のこと。

○弘誓……本願の別称。

同音 調聲
 煩^{ほん}惱^{のう}具^ぐ足^{そく}と信^{しん}知^ちして
 本^{ほん}願^{がん}力^{りき}に乘^{じよう}ずれば
 すなはち穢^え身^{しん}すてはてて
 法^{ほつ}性^{じよう}常^{じよう}樂^{らく}證^{じよう}ぜしむ
 一打

《言葉の意味》

○煩惱：身心を悩ませ、煩わせる精神作用の総称。衆生はこの煩惱によつて業を起し、苦報を受けて迷界に流転する。

○信知：自らのありさまを知らされる。

○本願力：本願になつて成就された衆生救済のはたらき。

○穢身：煩惱に汚れはてた凡夫の身体。

○すてはてて：その身を捨てて（命終わる臨終）とき。

○法性常樂：弥陀の浄土で得るところの仏のさとり。

同音

佛告阿難・及韋提希・下品下生者・

或有衆生・作不善業・五逆十惡・具

諸不善・如此愚人・以惡業故・應墮惡

道・經歷多劫・受苦無窮・如此愚人・

臨命終時・遇善知識・種種安慰・爲

說妙法・教令念佛・此人苦逼・不遑

念佛・善友告言・汝若不能念者・應

續いて釈尊は阿難と韋提希に仰せになった。

「次に下品下生について説こう。もともと重い五逆や十惡の罪を犯し、その他さまざまな悪い行いをしてゐるものがある。

このような愚かな人は、その悪い行いの報いとして悪い世界に落ち、計り知れないほどの長い間、限りなく苦しみを受けねばならない。

この愚かな人がその命を終えようとするとき、善知識にめぐりあい、その人のためにいろいろといたわり慰め、尊い教えを説いて、仏を念じることを教えるのを聞く。しかしその人は臨終の苦しみに責めさいなまれて、教えられた通りに仏を念じることができない。そこで善知識はさらに、へもし心に仏を念じることができないのなら、ただ口に

稱無量壽佛・如是至心・令聲不絕

・具足十念・稱南無阿彌陀佛・稱佛

名故・於念念中・除八十億劫・生

死之罪・命終之時・見金蓮華・猶如

日輪・住其人前・如一念頃・即得往

生・極樂世界・於蓮華中・滿十二大

劫・蓮華方開・觀世音・大勢至・以大悲

音聲・爲其廣說・諸法實相・除滅罪法

觀無量壽經

無量壽仏のみ名を称えなさい〜と勧める。こうしてその人が、心から声を続けて南無阿彌陀仏と十回口に称えようと、仏の名を称えたことによつて、一声一声称えるたびに八十億劫という長い間の迷いのもとである罪が除かれる。そしていよいよその命を終えるとき、金色の蓮の花がまるで太陽のように輝いて、その人の前に現れるのを見、たちまち極樂世界に生まれることができるのである。

その蓮の花に包まれて十二大劫が過ぎると、はじめてその花が開く。そのとき觀世音・大勢至の二菩薩は慈しみにあふれた声で、その人のために広くすべてのものの眞のすがたと、罪を除き去る教えをお説きになる。

・聞もん已に歡喜かんぎ・應おう時じ即そく發ほつ・菩ぼ提だい之し心しん・是ぜ

名み下よう品げ下ばん生げ者しょう・是ぜ名み下よう輩げ生はい想しょう・

名み第よう十だい六じゅう觀ろく・

說せつ是ぜ語ご時じ・韋い提だい希け・與よ五ご百ひゃく侍じ女にょ・聞もん佛ぶつ

所しよ說せつ・應おう時じ即そく見けん・極ごく樂らく世せ界かい・廣こう長じょう之し相そう

・得とく見けん佛ぶつ身しん・及ぎ二に菩ぼ薩さつ・心しん生しょう歡喜かんぎ・歎たん

未み曾ぞう有う・廓かく然ねん大だい悟ご・得とく無む生しょう忍にん・五ご百ひゃく

侍じ女にょ・發ほつ阿あ耨のく多たら羅ら・三さん藐みやく三さん菩ぼ提だい心しん・願がん

その人はこれを聞いて喜び、ただちにさとりを求める心を起すのである。これを下品下生のものと名づける。
以上のことを下品のものの往生の相といい第十六の觀と名づける。

釈尊がこのようにお説きになると、韋提希は五百人の侍女とともにその教えを聞いて、たちまち極樂世界の広大なすぐれた光景を見てまつた。さらに阿弥陀仏と觀世音・大勢至の二菩薩を見てまつることができ、心から喜び、これまでにはない尊いことであるとほめたたえ、すべての迷いが晴れて無生法忍のさとりを得た。

そして五百人の侍女も、それぞれこの上ないさとりを求める心を起こして、その国に生まれ

生しょう彼ひ國こく・世せ尊そん悉しつ記き・皆かい當とう往おう生じょう・生しょう彼ひ

國こく已い・得とく諸しよ佛ぶつ現げん前ぜん三さん昧まい・無む量りょう諸しよ天てん・發ほつ

無む上しょう道どう心しん・

爾に時じ阿あ難なん・即そく從じゅう座ざ起き・前ぜん白びやく佛ぶつ言ごん世せ尊そん

・當とう何が名み此し經きょう・此し法ほう之し要よう・當とう云うん何が受じゅ

持じ・佛ぶつ告ごう阿あ難なん・此し經きょう名みょう觀かん・極ごく樂らく國こく土ど・

無む量りょう壽じゆ佛ぶつ・觀かん世ぜ音おん菩ぼ薩さつ・大だい勢せい至し菩ぼ薩さつ・

亦やく名みょう淨じよう除じよ業ごう障しょう・生しょう諸しよ佛ぶつ前ぜん・汝にょ當とう受じゅ

觀無量壽經

たいと願つた。そこで釈尊はすべてのものに対して、みな往生することができ、その國に生まれたなら諸仏現前三昧を得ると約束され、これを聞いた数限りない天人も、みなこの上ないさとりを求める心を起こしたのである。

そのとき阿難は座から立ち、釈尊の前に進み出て申し上げた。「世尊、ただいまの教えは何と名づけたらよいのでしょうか。またこのお教えのかなめはどのようなにしていたもてばよいのでしょうか」

釈尊は阿難に仰せになった。「このお教えは『極樂世界と無量壽仏および觀世音菩薩・大勢至菩薩を觀ずる經』と名づけ、また『これまでの悪い行いもまたげとはならず、仏がたの前に生まれる經』と名づける」
そなたはこのお教えをたまち、決して忘れてはならない。この

持・無令忘失・行此三昧者・現身得

見・無量壽佛・及二大士・若善男子

・善女人・但聞佛名・二菩薩名・除無

量劫・生死之罪・何況憶念・若念

佛者・當知此人・是人中・分陀利華・

觀世音菩薩・大勢至菩薩・爲其勝友・

當坐道場・生諸佛家・佛告阿難・汝

好持是語・持是語者・即是持無量壽

觀仏三昧を行うものは、その身はこの世にありながら、無量寿仏および觀世音・大勢至の二菩薩を見たてまつることができ、善良なものたちが、ただ無量寿仏の名と觀世音・大勢至の二菩薩の名を聞くだけでも、はかり知れない長い間の迷いのもとである罪が除かれるのであるから、ましてそれらを心に念じ、常に思い続けるなら、なおさらのことである。

もし念仏するものがあるなら、まことにその人は白く清らかな蓮の花とたとえられる尊い人であると知るがよい。このような人は、觀世音・大勢至の二菩薩がすぐれた友となり、さとりの場合に座り、仏がたの家である無量寿仏の国に生まれるのである。「

釈尊は阿難に仰せになった。「そなたはこのことをしっかりと心にとどめるがよい。このことを心にとどめよというのは、すなわち無量寿仏の名を心にと

佛名・佛説此語時・尊者目犍連・阿難

及韋提希等・聞佛所説・皆大歡喜・

爾時世尊・足歩虚空・還耆闍崛山・爾

時阿難・廣爲大衆・説如上事・無量

諸天・及龍夜叉・聞佛所説・皆大歡

喜・禮佛而退。

佛説觀無量壽經

一打

どめよということである」
釈尊がこのようにお説きになつたとき、目連や阿難および韋提希たちは釈尊のこのお教えを聞いて、みな大いに喜んだのである。

こうして釈尊は大空を歩んで耆闍掘山にお歸りになり、阿難は山上で、そこに集うすべてのもののために、この釈尊の教えを説き聞かせた。数限りない天人や龍や夜叉も、その説法を聞いてみな大いに喜び、うやうやしく釈尊を礼拝して立ち去つたのである。

同音

調聲

南 な	南 な	南 な
無 も	無 も	無 も
阿 あ	阿 あ	阿 あ
弥 み	弥 み	弥 み
陀 だ	陀 だ	陀 だ
佛 ぶ	佛 ぶ	佛 ぶ

南 な	南 な
	無 も
	阿 あ
	弥 み
	陀 だ
	佛 ぶ

〔和讃〕

調聲

同音

弘誓のちからをかふらずは
いづれのとときに娑婆をいづん
佛恩ふかくおもひつつ
つねに弥陀を念ずべし

《言葉の意味》

○弘誓のちから……阿弥陀
仏の救い。

○娑婆……この現実世界の
ことで、内にはもろもろの
苦悩を忍んで受け、外には
寒・暑・風・雨などの苦を
受けて、これを堪え忍ばね
ばならないから、忍土・忍
界・堪忍土ともいう。

○おもひつつ……感謝をす
る。

○弥陀を念ずべし……お念
仏を称えること。

翻聲

同音

長 ^{じやう}	本 ^{ほん}	淨 ^{じやう}	娑 ^{しや}
時 ^じ	師 ^し	土 ^ど	婆 ^ば
に ^に	釋 ^{しゃ}	无 ^む	永 ^{よう}
慈 ^じ	迦 ^か	爲 ^い	劫 ^{きやう}
恩 ^{おん}	の ^の	を ^を	の ^の
を ^を	ち ^ち	期 ^き	苦 ^く
報 ^{ほう}	か ^か	す ^す	を ^を
ず ^ず	ら ^ら	る ^る	す ^す
べ ^べ	な ^な	こ ^こ	て ^て
し ^し	り ^り	と ^と	て ^て

《言葉の意味》

○永劫の苦……長い間の苦しみ。

○無為……涅槃の別名で、さとりそのものを言う。

○期すること……まちもうけること。

○釈迦のちから……お釈迦様の勧めによつて救いがあきらかになつた。

○長時……長きにわたつて。

○慈恩を報ず……恩徳を報謝する。

往^{おう} 同^{どう} 平^{びやう} 願^{がん}

生^{じやう} 發^{はつ} 等^{とう} 以^い

安^{あん} 菩^ぼ 施^せ 此^こ

樂^{らく} 提^{だい} 一^{いつ} 功^く

三打 國^{こく} 心^{しん} 切^{せつ} 德^{とく}

字

盤	涉 ^(シ)
黄	鐘 ^(ラ)
双	調 ^(ソ)
平	調 ^(ミ)
一	越 ^(レ)
盤	涉 ^(シ)

和讃音階譜の説明

▼ 印が横線に付いた場合は半音低く

● 印は2拍のぼす

お焼香の作法

本願寺は線香を立てません、線香は香炉の中に入る長さに折って置き、香を焚く種火と考えてください。（香炭団や炭があれば、その方がよりよい）

本物のお香はよい香りのするものです。焼香の意義から考えても、親戚一同の揃う法事には良い香りの上等なお香を買い求め準備しましょう。

お焼香の作法は、各宗派によって少しづつ異なっています。浄土真宗本願寺派は、

「お香はおいしいただかない」で「回数是一回」です。

<焼香の作法>



焼香の意義

- ① お浄土は百千の妙香が香っていると言われ、仏さまの好きな香りをさしあげる。
- ② 人間の体臭をやわらげ、心身を清浄にする。
- ③ 良い香りをいただき、浄土の妙香の世界を思い起こさせる。

調 声	調 声	調 声	ニ打	〔三 奉 請〕
奉 ^ぶ	奉 ^ぶ	奉 ^ぶ		
請 ^{じよう}	請 ^{じよう}	請 ^{じよう}		
十 ^{じつ}	釋 ^{しゃ}	彌 ^み		
方 ^{ほう}	迦 ^か	陀 ^だ		
如 ^{にょ}	如 ^{にょ}	如 ^{にょ}		
來 ^{らい}	來 ^{らい}	來 ^{らい}		
入 ^{にう}	入 ^{にう}	入 ^{にう}		
道 ^{どう}	道 ^{どう}	道 ^{どう}		
場 ^{じやう}	場 ^{じやう}	場 ^{じやう}		
同 音	同 音	同 音		
散 ^{さん}	散 ^{さん}	散 ^{さん}		
華 ^げ	華 ^げ	華 ^げ		
一樂 ^{らく}	樂 ^{らく}	樂 ^{らく}		

打

阿^あ

彌^み

陀^だ

經^{きよう}

〔表白〕

恭うやうや恭うやうやしくおもんみれば

阿弥陀如来あみだによらいは

罪業深重ざいごうじんじゅうの凡夫ぼんぶを救すくわんがために

他力回向たうきえこうの本願ほんがんを成就じょうじゅしたまい

釈迦如来しやくかにょらい

出世しゅっせの本懐ほんがいを顕あらわして

弥陀みだの本願ほんがんを説ときたもう

七高僧しちこうそうは

如来にょらいの正意しょういをうけつぎて

世よ々にこれを顕彰けんしょうし

宗祖親鸞聖人しゅうそしんらんしょうにん

これを教行信証きょうぎょうしんしょうに顕わしてあら

浄土真宗じょうどしんしゅうと名なづけたまえり

われ今幸いまさいわいに

聖人しょうにんの化導けどうによって、真実しんじつの教おしええを聞きき

大悲だいひの矜哀こうあいを蒙こうむって、真しんの仏弟子ぶつてしとなる

よろこばしいかな

報ほうじても報ほうじがたきは、如来にょらいの恩徳おんどく

謝しゃしても謝しゃじがたきは、師教しきょうの恩沢おんたくなり

然しかればすなわち

現生げんしょうには

仏祖ぶつその宏恩こうおんを仰あおいで、報謝ほうしゃの大道だいどうをあゆみ

当来とうらいには

往生おうじょうの素懷そかいを遂とげて、涅槃ねはんの妙果みょうかを証しょうせん

爰こゝに 本日ほんじつ

釋しゃく の 回忌かいきに当あたり、有縁うえんの人々ひとびと相集あいあつまり

恭恭うやうやしく仏前ぶつぜんを莊嚴しょうごんし、懇ろねんごに聖經しょうぎょうを讀誦どくじゆして

広大こうだいの仏恩ぶつおんを謝しゃしまつらん、敬うやまつて白もつす

一打

佛説阿彌陀經

姚秦三藏法師鳩摩羅什訳

同音

如是我聞・一時佛在・舍衛國・祇樹給

孤独園・與大比丘衆・千二百五十人

俱・皆是大阿羅漢・衆所知識・長老舍

利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦

旃延・摩訶俱絺羅・離婆多・周利槃陀

姚秦Ⅱ後秦の時代（西暦四〇〇年頃）
三藏法師Ⅱ三蔵の經典に精通した僧
鳩摩羅什Ⅱ中央アジアの龜茲国生まれ
の翻譯家。後秦の時代長安
に招かれ十二年間で般若經
や法華經など数多くの經典
を中国語訳した。

次のように、わたしは聞か
せていただいた。

あるとき、釈尊は舍衛國の
祇樹精舎においてになつて、
千二百五十人のすぐれた弟子
たちとご一緒であつた。

これらは皆世に知られた徳
の高い阿羅漢であつて、その
おもなものは、長老の舍利弗
をはじめ摩訶目犍連・摩訶迦
葉・摩訶迦旃延・摩訶俱絺羅・
離婆多・周利槃陀伽・難陀・
阿難陀・羅睺羅・橋梵波提・
賓頭盧頗羅墮・迦留陀夷・摩
訶劫賓那・薄拘羅・阿菟樓駄

伽・難陀・阿難陀・羅睺羅・憍梵波提・

などの弟子たちであつた。

寶頭盧頗羅墮・迦留陀夷・摩訶劫賓那

・薄拘羅阿菟樓駄・如是等・諸大弟子・

并諸菩薩・摩訶薩・文殊師利法王子・

またすぐれた菩薩たち、すなわち文殊菩薩・弥勒菩薩・乾陀訶提菩薩・常精進菩薩などの菩薩たちや、その他、帝釈天などの数限りない様々な神々も一緒にあつた。

阿逸多菩薩・乾陀訶提菩薩・常精進

菩薩・與如是等・諸大菩薩・及釋提

桓因等・無量諸天・大衆俱・

そのとき釈尊は長老の舍利弗に仰せになつた。

爾時佛告・長老舍利弗・從是西方・

「ここから西の方へ十萬億もの仏がたの国々を過ぎたところに、極樂と名づけられる世

過^{かじゅう}十^{まん}萬^{のく}億^{ぶつ}佛^ど土^う・有^せ世^{かい}界^み・名^な曰^{わつ}極^{ごく}樂^{らく}・

其^こ土^ど有^う佛^{ぶつ}・號^{ごう}阿^あ彌^み陀^だ・今^{こん}現^{げん}在^{ざい}說^{せつ}法^{ぼう}・舍^{しゃ}

利^り弗^{ふつ}・彼^ひ土^ど何^が故^こ・名^な爲^い極^{ごく}樂^{らく}・其^こ國^{こく}衆^{しゆ}

生^{じよう}・無^む有^う衆^{しゆ}苦^く・但^{たん}受^{じゆ}諸^し樂^{らく}・故^こ名^な極^{ごく}樂^{らく}・

又^う舍^{しゃ}利^り弗^{ふつ}・極^{ごく}樂^{らく}國^{こく}土^ど・七^{しち}重^{じゅう}欄^{らん}楯^{じゆん}・七^{しち}

重^{じゅう}羅^ら網^{もう}・七^{しち}重^{じゅう}行^{かう}樹^{じゆ}・皆^{かい}是^ぜ四^し寶^{ほう}・周^{しゅう}币^そ

圍^い繞^{によう}・是^ぜ故^こ彼^ひ國^{こく}・名^な曰^{わつ}極^{ごく}樂^{らく}・又^う舍^{しゃ}利^り

弗^{ふつ}・極^{ごく}樂^{らく}國^{こく}土^ど・有^う七^{しち}寶^{ぼう}池^ち・八^{はつ}功^く德^{どく}水^{すい}・

阿弥陀經

界がある。そこには阿弥陀仏と申しあげる仏がおられて、今現に教えをとおいておいでになる。

舍利弗よ、その国をなぜ極樂と名づけたかというとな、その国の人々は、何の苦しみもなく、ただいろいろな楽しみだけを受けているから、極樂というのである。

また舍利弗よ、その極樂世界には七重に囲む玉垣と七重におおう宝の網飾りと七重につらなる並木がある。そしてそれらはみな金・銀・瑠璃・水晶の四つの宝で出来ていて、國中のいたるところにめぐりわたっている。それでその国を極樂と名づけるのである。また舍利弗よ、極樂世界には七つの宝でできた池があつて、不可思議な力をもつた水がなみなみとたたえられてい

充滿其中・池底純以・金沙布地・四

辺階道・金銀瑠璃・玻瓈合成・上有

樓閣・亦以金銀瑠璃・玻瓈碑礫・赤珠

碼碯・而嚴飾之・池中蓮華・大如車輪

・青色青光・黄色黄光・赤色赤光・

白色白光・微妙香潔・舍利弗・極樂

國土・成就如是・功德莊嚴・

又舍利弗・彼佛國土・常作天樂・黃金

る。池の底には一面に金の砂が敷きつめられ、また四方には金・銀・瑠璃・水晶でできた階段がある。岸の上には樓閣があつて、それもまた金・銀・瑠璃・水晶・碑礫・赤真珠・瑪瑙で美しく飾られている。

また池の中には車輪のような大きな蓮の花があつて、青い花は青い光を、黄色い花は黄色い光を、赤い花は赤い光を、白い花は白い光を放ち、いづれも美しく、その香りは高く清らかである。舍利弗よ、極樂世界はこのようなるわしい姿をそなえているのである。

また舍利弗よ、その阿弥陀仏の国には常にすぐれた音楽が奏でられている。そして大

爲地・昼夜六時・而雨曼陀羅華・其國

衆生・常以清旦・各以衣祴・盛衆

妙華・供養他方・十萬億佛・即以食

時・還到本國・飯食經行・舍利弗・極

樂國土・成就如是・功德莊嚴・

復次舍利弗・彼國常有・種種奇妙・

雜色之鳥・白鵠孔雀・鸚鵡舍利・迦

陵頻伽・共命之鳥・是諸衆鳥・昼

阿弥陀經

地は黄金でできていて、昼夜六時にそれぞれにきれいな曼陀羅の花が降りそそぐ。その国の人々はいつも、すがすがしい朝に、それぞれの器に美しい花を盛り、他の国々の数限りない仏がたを供養する。

そして食事の時までには帰ってきて、食事をとってからしばらくの間はそのあたりを静かに歩き、身と心をととのえる。

舍利弗よ、極樂世界はこのようなるわしいすがたをそなえているのである。

また次に舍利弗よ、

その国はいつも白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命鳥などの色とりどりの美しい鳥がいる。このさまざまの鳥たちは、昼夜六時のそれぞれに優雅な声で鳴き、その鳴き声はそのまま五根・五力・七

夜六時・出和雅音・其音演暢・五根五

力・七菩提分・八聖道分・如是等法・

其土衆生・聞是音已・皆悉念佛・念法

念僧・舍利弗・汝勿謂此鳥・實是罪報

所生・所以者何・彼佛國土・無三惡趣

・舍利弗・其佛國土・尚無三惡道之

名・何況有實・是諸衆鳥・皆是阿彌

陀佛・欲令法音宣流・變化所作・舍利

菩提分・八聖道分などの尊い
教えを説き述べている。

そこでその国々の人々はみな、この鳴き声を聞いて仏を念じ、法を念じ、僧を念じるのである。舍利弗よ、そなたはこれらの鳥が罪の報いとして鳥に生まれたのだと思つてはならない。なぜなら阿弥陀仏の国には地獄や餓鬼や畜生のものがないからである。

舍利弗よ、その国には地獄や餓鬼や畜生の名さえないのだから、ましてそのようなものがあるはずがない。このさまざな鳥はみな、阿弥陀仏が法を説きひろめるために、いろいろな形を変えて表されたものにほかならないのである。

弗・彼佛國土・微風吹動・諸寶行樹・

及寶羅網・出微妙音・譬如百千種

樂・同時俱作・聞是音者・皆自然生・

念佛念法・念僧之心・舍利弗・其佛國

土・成就如是・功德莊嚴。

一打

舍利弗よ、またその仏の国では宝の並木や宝の髪飾りがそよ風に揺れ、美しい音楽が流れている。それは百千種もの楽器が同時に奏でられているようであり、その音色を聞くものは、だれでもおのずから仏を念じ、法を念じ、僧を念じる心を起すのである。

舍利弗よ、阿弥陀仏の国はこのようなるわし姿をそなえているのである。

調聲

同音

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛

阿^あ彌^み陀^だとなづけたてまつる

攝^{せつ}取^{しゆ}してすてざれば

念佛^{ねんぶつ}の衆^{しゆ}生^{じやう}をみそなはし

十方^{じふぱう}微^み塵^{じん}世^せ界^{かい}の

同音 調聲

〔和讃〕

《言葉の意味》

○十方微塵世界：十方世界を微塵に碎いたその数のように無数の世界。

○念仏の衆生：阿弥陀如来の本願を信ずる信心のひと。

○みそなはし：よくご覧になり、その人の心をよく知られる。

○攝取してすてざれば：如来に背を向け逃げていた私をついにだきとられたことを示す。

○阿弥陀：慈悲と智慧に限りがない仏さま。

同音 調聲
 萬 恒 沙 塵 數 の 如 來 は
 行 の 少 善 き ら ひ つ つ
 名 號 不 思 議 の 信 心 を
 ひ と し く ひ と へ に す す め し む

《言葉の意味》

○恒沙塵数の如來：：ガン
ジス川の砂や塵の数ほど多
くの十方の諸仏。

○万行の少善……『阿弥陀
經』の中の「少善根福德の
因縁」のことで、煩惱や欲
望の延長線上で行う善根功
徳。

○きらひつつ……嫌いおとしめる

○名号不思議の信心：「南無阿弥陀仏」の名号の不思議ないわれをすなおに聞き受けとった信心。

○ひとへにすすめしむ：
「自力万行、自力称名をす
てて他力の本願にたよれ」
と勧められる。

舍利弗・同音於汝意云何・彼佛何故・號阿

彌陀・舍利弗・彼佛光明無量・照十

方國・無所障礙・是故號爲阿彌陀・又

舍利弗・彼佛壽命・及其人民・無量

無辺・阿僧祇劫・故名阿彌陀・舍利弗

・阿彌陀佛・成佛以來・於今十劫・又

舍利弗・彼佛有無量無辺・聲聞弟子

舍利弗よ、そなたはどう思
うか。なぜその仏を阿弥陀と
申しあげるのだろうか。

舍利弗よ、その仏の光明に
は限りがなく、すべての国々
を照らして、何ものにもさま
たげられることがない。それ
で阿弥陀と申しあげるのであ
る。

また舍利弗よ、その仏の寿
命とその国の人々の寿命もと
もに限りがなく、実にはかり知
れないほど長い。それで阿弥
陀と申しあげるのである。舍
利弗よ、この阿弥陀仏が仏に
なられてから、今日まですで
に十劫という長い時が過ぎて
いる。

また舍利弗よ、その仏のも
とには数限りない聲聞の弟子
たちがいて、みな阿羅漢のさ
とりを得ている。その数の多

・皆阿羅漢・非是算數・之所能知・諸菩薩衆・亦復如是・舍利弗・彼佛國土・成就如是・功德莊嚴・

又舍利弗・極樂國土・衆生・生者・皆是阿鞞跋致・其中多有・一生補處・

其數甚多・非是算數・所能知之・但可

以無量無辺・阿僧祇劫・說・舍利弗・衆

生聞者・應當發願・願生彼國・所以

阿彌陀經

いことは、とても数えつくすことができない。また菩薩たちの数もそれと同じく、数え尽くすことができない。舍利弗よ、阿彌陀仏の国はこのようなるわしい姿をそなえているのである。

また舍利弗よ、極樂世界に生まれる人々はみな不退転の位に至る。その中には一生補處という最上の位の菩薩たちもたくさんいる。その数は実に多く、とても数え尽くすことができない。それを説くには限りない時をかけなければならない。

舍利弗よ、このようなありさまを聞いたなら、ぜひともその国に生まれたいと願うがよい。そのわけは、これらのすぐれた聖者たちと、ともに

者何・得與如是・諸上善人・俱會一處

・舍利弗・不可以少善根・福德因緣・

得生彼國・舍利弗・若有善男子・善

女人・聞說阿彌陀佛・執持名號・若

一日・若二日・若三日・若四日・若

五日・若六日・若七日・一心不乱・其

人臨命終時・阿彌陀佛・與諸聖衆・

現在其前・是人終時・心不顛倒・即得

同じところに集うことができ
るからである。

しかしながら舍利弗よ、わ
ずかな功德を積むだけでは、
とてもその国に生まれること
はできない。

舍利弗よ、もし善良なもの
が、阿彌陀仏の名号を聞き、
その名号を心にとどめ、ある
いは一日、あるいは二日、あ
るいは三日、あるいは四日、
あるいは五日、あるいは六日、
あるいは七日の間、一心に思
いを乱さないなら、その人が
命を終えようとするときに、
阿彌陀仏が多く、の聖者たちと
ともにその前に現れてくださ
るのである。

そこでその人がいよいよ命
を終えるとき、心が乱れるこ
となく、ただちに阿彌陀仏の
極樂世界に生まれることがで
きる。

往生・阿彌陀佛・極樂國土・舍利弗・

我見是利・故說此言・若有衆生・聞

是說者・應當發願・生彼國土・

舍利弗・如我今者・讚歎阿彌陀佛・不

可思議功德・東方亦有・阿閼鞞佛・須

彌相佛・大須彌佛・須彌光佛・妙音佛

・如是等・恒河沙數諸佛・各於其國・出

廣長舌相・遍覆三千大千世界・說

阿彌陀經

舍利弗よ、私はこのような利益があることをよく知っているから、このことを説くのである。もし人々がこの教えを聞いたなら、ぜひともその国に生まれたいと願うがよい。

舍利弗よわたしが今、阿彌陀仏の不思議な功德をほめたえているように、東方の世界にも、また阿閼鞞仏・須彌相仏・大須彌仏・須彌光仏・妙音仏など、ガンジス河の砂の数ほどのさまざまな仏がたがおられ、それぞれの国で広く舌相を示して、世界のすみずみにまで阿彌陀仏のすべれた徳が真実であることをあらわし、まごころをこめて、へそなたたち世の人々よ、この阿彌陀仏の不思議な功德をほめたたえて、すべての仏がた

誠實言・汝等衆生・當信是稱讚・不

がお護りくださる經を信じるがよいと仰せになつてい

可思議功德・一切諸佛・所護念經・

舍利弗・南方世界・有日月灯佛・名聞

光佛・大焰肩佛・須彌灯佛・無量精

進佛・如是等・恒河沙数諸佛・各於其

國・出廣長舌相・遍覆三千大千世界

・說誠實言・汝等衆生・當信是稱讚

・不可思議功德・一切諸佛・所護念經

舍利弗よ、また南方の世界にも日月灯仏・名聞光仏・大焰肩仏・須彌灯仏・無量精進仏など、ガンジス河の砂の数ほどのさまざまな仏がたがおられ、それぞれの国で広く舌相を示して、世界のすみずみにまで阿弥陀仏のすぐれた徳が真実であることあらわし、まごころをこめて、《そなたたち世の人々よ、この《阿弥陀仏の不可思議な功德をほめたえて、すべての仏がたがお護りくださる經》を信じるがよい》と仰せになつてい

舍利弗・西方世界・有無量壽佛・無

量相佛・無量幢佛・大光佛・大明佛

・寶相佛・淨光佛・如是等・恒河沙数

諸佛・各於其國・出廣長舌相・遍覆三

千・大千世界・說誠實言・汝等衆生・

當信是稱讚・不可思議功德・一切諸

佛・所護念經・

舍利弗・北方世界・有焰肩佛・最勝音

舍利弗よ、また西方の世界にも、無量壽仏・無量相仏・無量幢仏・大光仏・大明仏・宝相仏・淨光仏など、ガンジス河の砂の数ほどのさまざまな仏がたがおられ、それぞれ国で広く舌相を示して、世界のすみずみにまで阿彌陀仏のすぐれた徳が真実であることあらわし、まごころをこめて、へそなたたち世の人々よ、この《阿彌陀仏の不可思議な功德をほめたたえて、すべての仏がたがお護りくださる經》を信じるがよいと仰せになつてゐる。

舍利弗よ、また北方の世界にも、焰肩仏・最勝音仏・難

佛・難沮佛・日生佛・網明佛・如是等

・恒河沙数諸佛・各於其國・出廣長舌

相・遍覆三千・大千世界・說誠實言・

汝等衆生・當信是稱讚・不可思議功

徳・一切諸佛・所護念經・

舍利弗・下方世界・有師子佛・名聞佛

・名光佛・達摩佛・法幢佛・持法佛・如

是等・恒河沙数諸佛・各於其國・出廣

沮仏・日生仏・網明仏など、
ガンジス河の砂の数ほどのさ
まざまな仏がたがおられ、そ
れぞれの国で広く舌相を示し
て、世界のすみずみにまで阿
弥陀仏のすぐれた徳が真実で
あることあらわし、まごころ
をこめて、《そなたたち世の人
々よ、この《阿弥陀仏の不可
思議な功德をほめたたえて、
すべての仏がたがお護りくだ
さる経》を信じるがよい》と
仰せになつてゐる。

舍利弗よ、また下方の世界
にも、師子仏・名聞仏・名光
仏・達摩仏・法幢仏・持法仏
など、ガンジス河の砂の数ほ
どのさまざまな仏がたがおら
れ、それぞれの国で広く舌相
を示して、世界のすみずみに
まで阿弥陀仏のすぐれた徳が
真実であることあらわし、ま

長舌相・遍覆三千・大千世界・說誠

實言・汝等衆生・當信是稱讚・不可

思議功德・一切諸佛・所護念經・

舍利弗・上方世界・有梵音佛・宿王

佛・香上佛・香光佛・大焰肩佛・雜色

寶華嚴身佛・娑羅樹王佛・寶華德佛・

見一切義佛・如須彌山佛・如是等・恒

河沙數諸佛・各於其國・出廣長舌相・

ごころをこめて、へそなたたち世の人々よ、この《阿弥陀仏の不思議な功德をほめたたえて、すべての仏がたがお護りくださる經》を信じるがよい」と仰せになつてゐる。

舍利弗よ、また上方の世界にも、梵音仏・宿王仏・香上仏・香光仏・大焰肩仏・雜色寶華嚴身仏・娑羅樹王仏・寶華德仏・見一切義仏・如須彌山仏など、カンジス河の砂の数ほどのさまざまな仏がたがおられ、それぞれの国で広く舌相を示して、世界のすみずみにまで、阿弥陀仏のすぐれた徳が真実であることあらわし、まごころをこめて、へそなたたち世の人々よ、この《阿弥陀仏の不思議な功德をほ

阿弥陀經

遍へん覆ぶ三さん千せん・大だい千せん世せ界かい・說せつ誠じょう實じつ言ごん・汝にょ等とう

衆しゅ生じょう・當とう信しん是ぜ稱しょう讚さん・不ふ可か思し議ぎ功く德どく・

一いつ切さい諸しよ佛ぶつ・所しよ護ご念ねん經ぎょう。

めたたえて、すべての仏がた
がお護りくださる經を信じ
るがよいと仰せになつてい
る。

一打

副聲

南な無も 南な無も
阿あ弥み 阿あ弥み
陀だん 陀だん
佛ぶつ 佛ぶつ

同音

南な無も 南な無も
阿あ弥み 阿あ弥み
陀だん 陀だん
佛ぶつ 佛ぶつ
南な

證しやう誠じやう護ご念ねんせしめたり
 五ご濁じよく惡あく世せのためにとて
 極ごく難なん信しんののりをとき
 十じつ方ほう恒ごう沙じゃの諸しよ佛ぶつは

同音

調聲

〔和讃〕

《言葉の意味》

○極難信ののり……世間の道理を超越しているから、世間の常識や自力心では、はなはだ信じ難い法ということ。
 ○五濁……末世においてあらわれる避けがたい五種の汚れのこと。①劫濁。時代の汚れ。②飢饉や疫病、戦争などの社会悪が増大すること。③見濁。思想の乱れ。④邪惡な思想、見解がはびこること。⑤煩惱濁。貪・瞋・痴等の煩惱が盛んになること。④衆生濁。衆生の資質が低下し、十惡をほしいまにすること。⑤命濁。衆生の寿命が次第に短くなること。
 ○証誠護念……諸仏が阿弥陀仏の誓願の誤りのないことを証明し、念仏の行者をまもりたもうこと。

開聲

同音

彌^み陀^たの^の大^{だい}恩^{おん}報^{ほう}ず^ずべ^べし^し一^一打^打
 金^{きん}剛^{こう}心^{しん}を^をえ^えん^んひ^ひと^とは^は
 悲^ひ願^{がん}成^{じやう}就^{じゆ}の^のゆ^ゆへ^へな^なれ^れば^ば
 諸^{しよ}佛^{ぶつ}の^の護^ご念^{ねん}證^{じやう}誠^{じやう}は^は

《言葉の意味》

○悲願：大經第十七願、諸仏称名の願（諸仏が我が名をほめたたえなければさとりを開かない）のこと。

○金剛心：阿弥陀仏の本願を信ずる心をいう。如来回向の信心は、その体は仏智であつて、金剛のようになきわめて堅く、たじろがないことを喻えたもの。

舍利弗・同音於汝意云何・何故名爲一切

諸佛・所護念經・舍利弗・若有善男

子・善女人・聞是諸佛所說名・及經

名者・是諸善男子・善女人・皆爲一切

諸佛・共所護念・皆得不退轉・於阿耨

多羅・三藐三菩提・是故舍利弗・汝等

皆當・信受我語・及諸佛所說・舍利弗

舍利弗よ、そなたはどう思うか。なぜこれをへすべての仏がたがお護りくださる經と名づけたのだらうか。

舍利弗よ、もし善良な者たちが、このように仏がたがお説きになる阿弥陀仏の名とこの經の名を聞くなら、これらのものはみな、すべての仏がたに護られて、この上ないさとりに向かつて退くことのない位に至ることができぬ。

だから舍利弗よ、そなたたちはみな、私の説くこのお教えと、仏がたのお説きになることを深く信じて心にとどめるがよい。
舍利弗よ、もし人々が阿弥

・若にやくうにん有人・已い發願・今こん發願・當とう發願・欲よく

生しようあみだ阿彌陀佛國者・是ぜ諸人等・皆かいとくふ得不

退たいてん轉・於おあ阿耨多羅・三藐三菩提・於おひ彼

國土・若にやくいしよう已生・若にやくこんじよう今生・若にやくとうしよう當生・

是ぜ故舍利弗・諸善男子・善女人・若にやくう有

信者・應當發願・生彼國土・

舍利弗・如我今者・稱讚諸佛・不可思

議功德・彼諸佛等・亦稱說我・不可思

陀仏の國に生まれたいとすでに願ひ、または今願ひ、あるいはこれから願うなら、みなこの上ないさとりに向かつて退くことのない位に至り、その國にすでに生まれてゐるかまたは今生まれるか、あるいはこれから生まれるのである。

だから舍利弗よ、仏の教えを信じる善良な者たちは、ぜひともその國に生まれたいと願うべきである。

舍利弗よ、わたしが今、仏がたの不思議な功德をほめたたえているように、その仏がたもまた、わたしの不思議な功德をほめたたえられてこのように仰せになつてゐる。

議ぎ功く徳どく・而に作さ是ぜ言ごん・釋しゃ迦か牟む尼に佛ぶつ・能のう爲い

甚じん難なん・希け有う之し事じ・能のう於お娑しゃ婆ば國こく土ど・五ご濁じよく

惡あく世せ・劫こう濁じよく・見けん濁じよく・煩ぼん惱のう濁じよく・衆しゆ生じよう濁じよく

・命み濁じよくちゆう中ちゆう・得とく阿あ耨のく多たら羅さんみやくさん・三さん藐みやく三さん菩ぼ

提だい・爲い諸しよ衆しゆ生じよう・說せつ是ぜ一いつ切さい世せ間けん・難なん信しん之し

法ほう・舍しゃ利り弗ふつ・當とう知ち我が於お・五ご濁じよくあく惡せ世ぎ・行ぎよう

此し難なん事じ・得とく阿あ耨のく多たら羅さんみやくさん・三さん藐みやく三さん菩ぼ提だい・爲い

一いつ切さい世せ間けん・說せつ此し難なん信しん之し法ほう・是ぜ爲い甚じん難なん・

（釈迦牟尼仏は、世にもまれな難しく尊い行を成しとげられた。娑婆世界はさまざまに濁りに満ちていて、汚れきつた時代の中、思想は乱れ、煩惱は激しくさかんであり、人々は惡事を犯すばかりで、その寿命はしだいに短くなる。そのような中にありながらこの上ないさとりを開いて、人々のためにすべての世に超えすぐれた信じがたいほどの尊い教えをお説きになったのである。）

舍利弗よ、よく知るがよい。わたしは濁りと惡に満ちた世界で難しい行を成しとげこの上ないさとりを開いて仏となり、すべての世界の者のためにこの信じがたいほどの尊い教えを説いたのである。このことこそ、まことに難しいことなのである」

阿弥陀經

佛ぶつ說せつ此し經きやう已い・舍しゃ利り弗ほつ・及ぎやう諸しよ比び丘く・一いつ

切さい世せ間けん・天てん人にん阿あ修しゆう羅ら等とう・聞もん佛ぶつ所しよ說せつ・歡かん

喜ぎ信しん受じゆ・作さ禮らい而に去こ。

佛ぶつ說せつ阿あ彌み陀だ經きやう

一打

このように仰せになつて、このお教えを説きおられると、舍利弗をはじめ、多くの修行僧たちも、すべての世界の天人や人々も、阿修羅などもみな、この尊い教えを承つて喜びに満ちあふれ、深く信じて心にとどめ、うやうやしく礼拝して立ち去つたのである。

翻聲

南な無も阿あ彌み陀だ佛ぶつ

同音

南な無も阿あ彌み陀だ佛ぶつ

恒じやう沙しやのの諸しよ佛ぶつすすめめたたる
 彌み陀たのの名な號ごうああたたへへててぞ
 濁じよく惡あく邪じゃ見けんのの衆しゆ生じやうにには
 五ご濁じよく惡あく時じ惡あく世せ界かい

《言葉の意味》

○五濁：…阿弥陀經93ヶ前半に説かれる。①劫濁。戦争などの社会悪が増大すること。②見濁。思想の乱れ。邪悪な思想、見解がはびこること。③煩惱濁。貪・痴等の煩惱が盛んになること。④衆生濁。衆生の資質が低下し、十惡をほし、いままにすること。⑤命濁。衆生の寿命が次第に短くなること。

○惡時惡世界：…①劫濁と③煩惱濁のことをいう。

○濁惡邪見：…②見濁と④衆生濁のことをいう。

○弥陀の名号：…「南無阿弥陀仏」のお念仏。

開聲

同音

南な无も阿あ彌み陀だ佛ぶつををととななふふれればば
 十じつ方ほう无む量りょうのの諸しよ佛ぶつはは
 百ひゃく重じゅう千せん重じゅう圍い繞にやうししてて
 よよろろここびびままももりりたたままふふななりり

《言葉の意味》

○ 圍繞……とりかこむこと。

○ よろこびまもりたまふ……念仏するものを無量の諸仏が喜んで護っている。

同音

調声

往^{おう} | 同^{どう} | 平^{びやう} | 願^{がん} |

生^{じやう} | 發^{はつ} | 等^{どう} | 以^い |

安^{あん} | 菩^ぼ | 施^せ | 此^こ |

樂^{らく} | 提^{だい} | 一^{いつ} | 功^く |

三打 國^{こく} | 心^{しん} | 切^き | 德^{とく} |

〈読み方〉

願わくばこの功德を以て

平等に一切に施し

同じく菩提心をおこして

安樂國に往生せん

讃 仏 偈

◎讃仏偈は、『嘆仏偈』とも呼ばれ『仏説無量寿経（大経）』の上巻に説かれる四句二十偈の讃歌です。『無量寿経』は阿弥陀如来の浄土建立と凡夫が往生できるいわれが説きあかされています。この阿弥陀如来の本願は、如来が法蔵菩薩のとき、師仏、世自在王如来のもとで誓われたもので、そのさい師仏のけ高い姿を仰いで、その御徳をたたえ、師仏に向かつて御自身の信念と願いをお述べになつたものが本偈であります。

二打

世尊永無	窮深尽奥	殊勝希有	戒聞精進	超世無倫	皆悉隱蔽	無与等者	光顔巍巍
人雄師子	究其涯底	深諦善念	三昧智慧	正覚大音	猶若聚墨	日月摩尼	威神無極
神徳無量	無明欲怒	諸仏法海	威徳無侶	響流十方	如来容顔	珠光焰耀	如是焰明

光かがやく師のお顔は この上なく威力にあふれ、そのかがやかしさは、世に等しいものがない。
 太陽や月の光も宝玉の輝きも、その前にすべて失われ、まるで墨のかたまりのようである。
 まことにみ仏のお顔は、世に超えすぐれてくらべようもなく、さとの声は高らかに、すべての世界に響きわたる。
 持戒と多聞と精進と禪定と智慧（六波羅密）、これらのお徳は並ぶものがなく、とりわけすぐれて世にまれである。
 さまざまな仏がたの教えの海に深く明らかに思いをこらし、その奥底を限りなく深くきわめ尽くしておいになる。
 愚かさや貪りや怒りなど世尊にはまった

功勲 くくん 廣大 こうだい	震動 しんどう 大千 だいせん	過度 かど 生 しょう 死 じ	戒忍 かいにん 精進 しやうじん	吾誓 ごせい 得 とく 仏 ぶつ	為 い 作 さ 大 だい 安 あん	無量 むりやう 大 だい 聖 しやう	斯等 しとう 諸 しよ 仏 ぶつ	譬 ひ 如 にょ 恒 ごう 沙 じゃ	無数 むしゆ 刹 せつ 土 ど	如 にょ 是 ぜ 精進 しやうじん
智慧 ちえ 深妙 じんみやう	願 がん 我 が 作 さ 仏 ぶつ	摩 み 不 ふ 解 げ 脱 だつ	如 にょ 是 ぜ 三昧 さんまい	普行 ふぎやう 此願 しがん	假 け 使 し 有 う 仏 ぶつ	数 しゆ 如 にょ 恒 ごう 沙 じゃ	不 ふ 如 にょ 求 く 道 どう	諸 しよ 仏 ぶつ 世 せ 界 かい	光明 こうみやう 悉照 しつしやう	威神 いじん 難量 なんりやう
光明 こうみやう 威 い 相 そう	齊 さい 聖 しやう 法 ほう 王 おう	布施 ふせ 調意 じやうい	智慧 ちえ 為 い 上 じやう	一切 いつさい 恐懼 くく	百 ひやく 千 せん 億 のくまん 万 まん	供養 くやう 一 いつ 切 さい	堅 けん 正 しやう 不 ふ 却 きやく	復 ふ 不 ふ 可 か 計 けい	偏 へん 此 し 諸 しよ 國 こく	令 りやう 我 が 作 さ 仏 ぶつ

くなく、人の世にあって獅子のように雄々しい方であり、はかり知れないすぐれた功德をそなえておいでになる。

その功德はとても廣大であり、知恵もまた深くすぐれ、輝く光のお力は、世界中を震わせる。

願わくは、わたしも仏となり、この世自在王仏のように迷いの人々をすべて救い、さとりの世界に至らせたい。

布施と調意と持戒と忍辱と精進、このような禅定と智慧を修めて、この上なくすぐれたものとしよう。

わたしは誓う、仏となるときは必ずこの願を果しとげ、生死の苦におののくすべての人々に大きな安らぎを与えよう。

たとえ多くの仏がたがおいでになり、その数はガンジス河の砂のように数限りないとしても、それらすべての仏がたを残らず供養したてまつるより、固い決意でさとりを求め、ひるまずひたすら励む方が、功德はさらにまざるであらう。

たとえガンジス河の砂の数ほどの仏がたの世界があり、はかり知れないほどの数限りない国々があるとしても、わたしの光明はそのすべてを照らして、至らないところ

国土第一 其衆奇妙 道場超絶
 国如泥恒 而無等双 我当哀愍
 度脱一切 十方来生 心悦清浄
 已到我国 快樂安穩 幸仏信明
 是我真証 発願於彼 力精所欲
 十方世尊 智慧無碍 常令此尊
 知我心行 仮令身止 諸苦毒中
 我行精進 忍終不悔 一打

南無阿弥陀仏 一打
 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

願以此功德 同發菩提心
 平等施一切 往生安樂国
 一打

がにように、おこたることなく努め励んで、すぐれた光明をそなえたい。
 わたしが仏になるときは、国土をもっとも尊いものにしよう。住む人々は徳が高く、悟りの場も超えすぐれて、涅槃の世界そのもののように、並ぶものなくすぐれた国としよう。

わたしは哀れみの心をもって、すべての人々を救いたい。
 さまざまな国からわたしの国に生まれたと思うものは、みな喜びに満ちた清らかな心となり、わたしの国に生まれたなら、みな快く安らかにさせよう。

願わくば、師の仏（世自在王仏）よ、照覧あれ、これがわたくしの真心のあかしである。

このような願いの実現を期して、わたくしは最大の精進を重ねる決意である。
 十方世界におわす、智慧限りなき仏たちよ。常にその明らかな仏眼をもって、わたくしの発願修行を見守りたまえ。
 たとえ、これらの願いのために、わが身を地獄のような苦難の毒の中に沈めようと、わたくしはその実現に努め励んで、決して悔いることはないであらう。

五こ濁じよく惡あく時じ惡あく世せ界かい

濁じよく惡あく邪じゃ見けんの衆しゆ生じようには

弥み陀だのの名みやう号ごうああたたへへててぞ

恒こう沙しゃのの諸しよ仏ぶつすすすすめめたたる

弥み陀だのの名みやう号ごうととななへへつつ

信しん心じんままここととににううるるひひととは

憶おく念ねんのの心しんつつねねににしして

仏ぶつ恩おん報ほうずずるるおおももひひああり

●●
調声 (し)

歸命無量壽如來

さみようむりようじゆによらい

同音

なもふかしぎこう

南無不可思議光

ほうぞうぼさついんに

法蔵菩薩因位時

さいせじさいおうぶつしよ

在世自在王仏所

觀見諸仏淨土因

とけんしよぶつじようどいん

国土人天之善惡

こくどにんでんしぜんまく

建立無上殊勝願

こんりゅうむじようしゅしやうがん

超発希有大弘誓

ちやうほつけうだいぐぜい

五劫思惟之摂受ごこう しゆい ししょう じゆ 引

重誓名声聞十方じゅうせい みよう しょうもんじつ ぼう 引

普放無量無辺光ふほう むりょう むへん こう 引

無碍無对光炎王むげ むたいこう えんのう 引

清淨歡喜智慧光しょうじょう かんぎ ちえ こう 引

不斷難思無称光ふだん なんじ むしょう こう 引

超日月光照塵刹ちようにちがっこうしょうじん せつ 引

一切群生蒙光照いっさいぐんじょう むこうしょう 引

本願名号正定業ほんがなんみょうごうしょうじょうごう引

至心信樂願為因ししんしんぎょうがんにん引

成等覺証大涅槃じょうとうがくしょうだいねはん引

必至滅度願成就ひつしめつどがんにょうじゆ引

如來所以興出世にょらいしよいこうしゅつ引

唯說弥陀本願海ゆいせつみだほんがんかい引

五濁惡時群生海ごじよくあくじぐんじょうかい引

忘信如來如實言おうしんにょらいによじつごん引

能發一念喜愛心のう ほつ いちねん きあい しん 引

不斷煩惱得涅槃ふだん ぼんのう とくね はん 引

凡聖逆謗齊回入ぼんじょう ぎやく ほうさい えん にゅう 引

如衆水入海一味によ しゆ しい にゅう かい いち み 引

攝取心光常照護せつ しゆ しん こうじょう しょうご 引

已能雖破無明闇いのう すいは む みょう あん 引

貪愛瞋憎之雲霧とんない しんぞう しうん む 引

常覆真實信心天じょう ふ しんじつ しんじん てん 引

譬如日光覆雲霧 ひによにっこうふうんむ引

雲霧之下明無闇 うんむしげみうむあん引

獲信見敬大慶喜 ぎやくしんけんきやうだいきやうき引

即横超截五惡趣 そくおうちやうぜつごあくしゆ引

一切善惡凡夫人 いっさいぜんまくほんぶにん引

聞信如來弘誓願 もんしんにょらいぐぜいがん引

仙言宏大勝解者 ぶつごんこうだいしやうげしや引

是人名分陀利華 ぜにんみやうふんだりけ引

彌陀仏本願念仏みだぶつほんがんねんぶつ引

邪見憍慢惡衆生じゃけんきょうまんあくしゆじよう引

信樂受持甚以難しんぎようじゅじんになん引

難中之難無過斯なんちゅうしなんむか引

印度西天之論家いんどさいてんしろん引

中夏日域之高僧ちゅうかじちいきしこうそう引

頭大聖興世正意けんだいしやうこうせしやうい引

明如來本誓忘機みやうにょらいほんせいおうき引

釈迦如来楞伽山しゃかにょらいりょうがせん引

為衆告命南天竺いしゆごうみょうなんてんじく引

竜樹大士出於世りゅうじゅだいじしゅつとせ引

悉能摧破有無見しつのうさいはうむけん引

宣説大乘無上法せんぜつだいじょうむじょうほう引

証歡喜地生安樂しょうかんぎじしょうあんらく引

顕示難行陸路苦けんじなんぎょうろくろく引

信樂易行水道樂しんぎょういぎょうしいどうらく引

憶念弥陀仏本願おくねんみだぶつほんがん
自然即時入必定じねんそくじにゅうひつじょう
唯能常称如来号ゆいのうじょうしょうによらいごう
忘報大悲弘誓恩おうほうだいひぐぜいおん

天親菩薩造論説てんじんぼさつぞうろんせつ
歸命無碍光如来きみょうむげこうによらい
依修多羅頭真実えしゆたらけんしんじつ
光闡横超大誓願こうせんおうちやうだいせいがん

引

こう ゆほんがん りきえ こう

広由本願力回向

い ど ぐん じょう しょう いっ しん

為度群生彰一心

きにゅう く どく だい ほう かい

歸入功德大宝海

いつ ぎやく にゅう だい え しゅ しゅ

必獲入大会衆數

一
一
一

とく し れん げ ぞう せ かい

得至蓮華藏世界

そく しょう しん によ ほつ しょう じん

即証真如法性身

ゆう ほん のう りん げん じん ずう

遊煩惱林現神通

にゅう しょう じ おん じ おう げ

入生死園示忘化

一
一
一

本師曇鸞梁天子ほん し どんらんりょうてん し 引

常向鸞処菩薩礼じょう こう らんしょ ぼ さん さい 引

三蔵流支授淨教さん ぞう る し じゆ じょう ぎょう 引

梵燒仙經歸樂邦ぼん じょう せんぎょう きらく ほう 引
一一一

天親菩薩論註解てん じん ぼ さん ろん ちゅう げ 引

報土因果顯誓願ほう と いん が けん せい がん 引

往還回向由他力おう げん ね こう ゆ た りき 引

正定之因唯信心しょう じょう し いん ゆい しん じん 引
一一一

惑染凡夫信心発わくぜんほんぶしんじんぼつ引

しょうちしょうじそくねはん引

証知生死即涅槃

いつしむりょうこうみょう引

必至無量光明土

しょうしゅじょうかいふ引

諸有衆生皆普化引

道綽決聖道難証どうしゃくけつしょうどうなんしょう引

ゆいみょうじょうどかつうにゅう引

唯明淨土可通入

まんぜんじりきへんごんしゅ引

万善自力賤勤修

えんまんとくごうかんせんしょう引

円満徳号勸専称引

三不三信誨懃さんぶさんしんけおんこん引

ぞうまつほうめつどうひん引

像末法滅同悲引

いっしょうぞうあくちぐぜい引

一生造惡値弘誓

次第にゆくしあんにようがいしょうみょうか引

至安養界証妙果

善導調声(シ)独明仏正意ぜんどうどくみょうぶつしょうい引

同音 こうあいじょうさんよぎやくあく引

矜哀定散与逆惡

こうみょうみょうごうけんいんねん引

光明名号顕因縁

かいにゅうほんがんだいちかい引

開入本願大智海

うに(る)引

行者正受金剛心ぎやう じゃしやう じゆ こんごう しん

慶喜一念相応後けいぎ 一念 相応 後

与韋提等獲三忍よ い だいとう ぎやく さん にん

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

源信広開一代教げん しん こう かい いち だい ぎやう

偏帰安養勸一切へん き あん にやう かん いっ さい

專雜執心判淺深せん ぞう しやう しん はん せん じん

報化二土正弁立ほう け に ど しやう べん りゅう

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

源信広開一代教げん しん こう かい いち だい ぎやう

偏帰安養勸一切へん き あん にやう かん いっ さい

專雜執心判淺深せん ぞう しやう しん はん せん じん

報化二土正弁立ほう け に ど しやう べん りゅう

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

即証法性之常樂即 証 法 性 之 常 樂

ごくじゅうあくにんゆいしょうぶつ引
極重惡人唯称仏

がやくざいひせつしゅちゅう引
我亦在彼攝取中

ほんのうしょうげんすいふけん引
煩惱障眼雖不見

だいひむけんじょうしょう引
大悲無倦常照我

ほんしげんくうみょうぶつ引
本師源空明仏教

れんみんぜんまくほんぶにん引
憐愍善惡凡夫人

しんしゅうきょうしょうこうへんしゅう引
真宗教証興片州

下せんじやくほんがんぐあくせー引
選拔本願弘惡世

げんらいしょう じりん でんげい

還来生死輪轉家

けつ ち ぎじょう いしよ し

決以疑情為所止

そくにゆうじやくじょう む い らく

速入寂靜無為樂

下 ひつ ち しんじん い のう にゆう

必以信心為能入

い ぐう

ぐ さよう だい じ しゅう し とう

弘經大士宗師等

じよう さい む へん ごくじよく あく

拯濟無辺極濁惡

どう ぞく じ しゅ ぐ どう しん

道俗時衆共同心

ゆい か しん し こう そう せつ

唯可信斯高僧說

せ せう せ

(ハ調レ)

初重

●南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南

弥陀成仏和讃

調声

弥陀成仏のこのかたは

同音

いまに十劫をへたまへり

法身の光輪きはもなく

世の盲冥をてらすなり

南	南	南	南	南
無	無	無	無	無
阿	阿	阿	阿	阿
弥	弥	弥	弥	弥
陀	陀	陀	陀	陀
仏	仏	仏	仏	仏

調声

智慧の光明はかりなし

同音

有量の諸相ことごとく

光こう暁けうかふらぬものはなし

しんじつみよう
きみよお

眞実明に歸命せよ

南 な	南 な	南 な	南 な
無 も	無 も	無 も	無 も
	阿 あ	阿 あ	阿 あ
	弥 み	弥 み	弥 み
	陀 だ	陀 だ	陀 だ
	仏 ぶ	仏 ぶ	仏 ぶ

、南 な	一南 な	一南 な	一阿 あ ^{二重} _(八調ミ)
、無 も	一無 も	一無 も	一弥 み
、阿 あ	一阿 あ	一阿 あ	一陀 だ
、弥 み	一弥 み	一弥 み	一仏 ぶ
、陀 だ	一陀 だ	一陀 だ	
、仏 ぶ	一仏 ぶ	一仏 ぶ	

一南 な	一南 な	一南 な	一南 な
一無 も	一無 も	一無 も	一無 も
一阿 あ	一阿 あ	一阿 あ	一阿 あ
一弥 み	一弥 み	一弥 み	一弥 み
一陀 だ	一陀 だ	一陀 だ	一陀 だ
一仏 ぶ	一仏 ぶ	一仏 ぶ	一仏 ぶ

調声

げだつ こうりん わ

解脱の光輪きはもなし

— — — — —

同音

こうぞく うむ

光触かふるものはみな

— — — — —

有無をはなるとのべたまふ

— — — — —

びょうどうかく きみよお

平等覺に歸命せよ

— — — — —

— 南 な — 南 な — 南 な — 南 な — 南 な
 — 無 も — 無 も — 無 も — 無 も — 無 も
 — 阿 あ — 阿 あ — 阿 あ — 阿 あ — 阿 あ
 — 弥 み — 弥 み — 弥 み — 弥 み — 弥 み
 — 陀 だ — 陀 だ — 陀 だ — 陀 だ — 陀 だ
 — 仏 ぶ — 仏 ぶ — 仏 ぶ — 仏 ぶ — 仏 ぶ

調声

こううん むーげー にほ こ くら

光雲無碍如虚空

同音

いっさい

うげ

お

うい

一切の有碍にさはりなし

こうたく

む

い

こ

い

光沢かふらぬものぞなき

なんじ

ぎ

さみよお

難思議を帰命せよ

べー ー ー ー ー ー

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

三重（ハ調）

南無阿彌陀仏

南な無も阿あ弥み陀だ仏ぶ

南な
無む
阿あ
弥み
陀だ
仏ぶつ

南な
無も
阿あ
弥み
陀だ
仏ぶ

南な無も阿あ弥み陀だ仏ぶ

南無阿彌陀仏

南^な

同音

清浄光明ならびなし

く 子
し 子
こ 一
う 一
一 子
一 一
元 子
一 一
一 子

遇斯光のゆへなれば

いっ
さ
い
31
ご
つ
け
31
—
—
—
31
31

一切の業繋ものぞこりぬ

ひっ
きょ
うえ
う
え
き
み
よ
お
え

畢竟依を歸命せよ

南 な 南 な 南 な 南 な 南 な
無 も 無 も 無 も 無 も
阿 あ 阿 あ 阿 あ 阿 あ
弥 み 弥 み 弥 み 弥 み
陀 だ 陀 だ 陀 だ 陀 だ
仏 ぶ 仏 ぶ 仏 ぶ 仏 ぶ

調声

同音

音

ぶつこう せうえうー さいだい いち

仏光照曜 最第一

こうえん のうぶつ

光炎王仏となづけたり

さんず さんあん

三塗の黒闇むらくなり

だいおうぐ いき

大応供を帰命せよ

調声

(ミ)

同音

				願	が
				以	に
				此	し
				功	く
				徳	ど
往	同	平	び		
生	発	等	よう		
安	菩	施	どう		
楽	提	一	い		
国	心	切	さい		

(ハ調レ)

初重

●南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南

調声

五十六億七千万

同音 弥勒菩薩はとしをへん

まことの信心うるひとは

このたびさとりをひらくべし

南な無も阿あ弥み陀だ仏ぶ
 南な無も阿あ弥み陀だ仏ぶ
 南な無も阿あ弥み陀だ仏ぶ
 南な無も阿あ弥み陀だ仏ぶ

調声
 念ねん仏ぶつ往生おうじょうの願がんにより

同音
 等とう正じょう覺がくにいたるひと

すなわち弥勒みろくにおなじくて

大般涅槃だいはんねはんをさとるべし

南な
無も

南な
無も
阿あ
弥み
陀だ
仏ぶ

南な
無も
阿あ
弥み
陀だ
仏ぶ

南な
無も
阿あ
弥み
陀だ
仏ぶ

、南な
、無も
、阿あ
、弥み
、陀だ
、仏ぶ

一南な
一無も
一阿あ
一弥み
一陀だ
一仏ぶ

、南な
、無も
、阿あ
、弥み
、陀だ
、仏ぶ

一阿あ
一弥み
一陀だ
一仏ぶ

二重
(八調三)

一南な

、南な
、無も
、阿あ
、弥み
、陀だ
、仏ぶ

一南な
一無も
一阿あ
一弥み
一陀だ
一仏ぶ

一南な
一無も
一阿あ
一弥み
一陀だ
一仏ぶ

ぜう ぼう

ち にん

調 声

像法のときの智人も

じりき しょけう

同 音

自力の諸教をさしおきて

じき せう おう ほう

時機相応の法なれば

ねんぶつもん

念仏門にぞいりたまふ

へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

●南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南

調声

弥陀の尊号となへつつ

しんげう

同音 信楽まことにうるひとは

おくねん

憶念の心つねにして

ぶつとんほう

仏恩報ずるおもひあり

南^な 南^な 南^な 南^な 南^な
 無^も 無^も 無^も 無^も 無^も
 阿^あ 阿^あ 阿^あ 阿^あ 阿^あ
 弥^み 弥^み 弥^み 弥^み 弥^み
 陀^だ 陀^だ 陀^だ 陀^だ 陀^だ
 仏^ぶ 仏^ぶ 仏^ぶ 仏^ぶ 仏^ぶ

調声

五^ご 濁^{じよく} 惡^{あく} 世^せ の 有^う 情^{じよう} の

同音

選^{せん} 択^{じやく} 本^{ほん} 願^{がん} 信^{しん} ず れ ば

不可^{ふか} 称^{しょう} 不可^{ふか} 説^{せつ} 不可^{ふか} 思議^{しぎ} の

功^く 徳^{どく} は 行^{ぎよう} 者^{じや} の 身^み に み て り

調声

(ミ)

同音

願が以に此し功く徳どく

びよう どう せー いっ さい

平等施一切

どう ほう ぼー だい しん

同発菩提心

おう じよう あん ちやう こく

往生安楽国

御文章

〈八万法蔵の章〉

御文章は別名「お文」おみとも呼ぶように、本願寺第八代の蓮如上人が折にふれ門信徒に書き与えられたお手紙である。のちに、これを門信徒の前で、蓮如上人の御法話と同じく朗読するようになり、そのため勤行の時の正面から座を変え拝読、聴聞する作法になった。

《言葉の意味》

○八万の法蔵……仏の説かれた教法全体のこと。八万は多数をあらわす。

○後世をしらざる人……後生の一大事に関心のない者。

○尼入道……ここでの尼は在俗生活のまま髪をおろして仏門に入った女性をいう。入道は在俗生活のまま剃髪して仏門に入った男性をいう。

○当流……浄土真宗を指す。

○あながちに……むりに。

○一念……一心に阿弥陀仏をたのんで二心のないことを指している。

それ、八万はちまんの法蔵ほうざうをしるといふとも、後世ごせをしらざる人ひとを愚者ぐしゃとす、たとひ一文不知いちもんふちの尼あまに入道いうどうなりといふとも、後世ごせをしるを智者ちしゃとすといへり、しかれば当流とうりゅうのこころは、あながちにもろもろの聖教しょうぎょうをよみ、ものをしりたりといふとも、一念いちねんの

信心しんじんのいはれをしらざる人ひとは、いた

づらごとなりとしるべし、されば、

聖人しょうにんの御おんことばにも、一切いっさいの男女なんによた

らん身みは、弥陀みだの本願ほんがんを信しんぜずして

は、ふつとたすかるといふことある

べからずと仰おおせられたり、このゆゑ

にいかなる女人にょにんなりといふとも、も

ろもろの雑行ぞうぎょうをすて、一念いちねんに弥陀みだ

如来にょらいこんど今度の後生ごしょうたすけたまへと、ふ

かくたのみまうさん人ひとは、十人じゅうにんも

百人ひやくにんも、みなともに弥陀みだの報土ほうどに往おう

○いたづらごと……むなしく無益なこと。

○聖人……宗祖親鸞聖人。

○ふつと……全く。

○雑行……雑は邪雑、雑多の意味で、お念仏以外の教えを信じ行うこと。

○後生……後世ともいう。来生・来世のこと。後に来るべき生涯の意。

○たすけたまへ……浄土真宗では、衆生が阿弥陀如来に向かつておたすけを請求する意ではなく、許諾（先方の言いつ分を許し承諾する）の義で、必ずたすける」という本願招喚の勅命を領納して、仰せの通りに信順している信相をあらわす。

○弥陀の報土……阿弥陀仏の願いによつて建立された浄土

○往生……阿弥陀仏の浄土に

生^{じう}すべきこと・さらさら・疑^{うたがひ}ある

べからざるものなり、

あなかしこあなかしこ

〈信心獲得の章〉

信心^{しんじんぎやくとく}獲得すといふは、第十八^{だいじゅうはち}の

願^{がん}をこころうるなり、この願^{がん}をこ

ろうるといふは、南無^{なむ}阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}のす

がたをこころうるなり、このゆゑに

南無^{なむ}と歸命^{きみょう}する一念^{いちねん}の処^{ところ}に、発願^{ほつがん}

回向^{えこう}のこころあるべし、これすなは

往き生れることをいう。

○あなかしこ：：おそれ多く存じます、から転じて書簡の末尾におかれる慣用語。御文章では内容を強調し念をおす語として用いられている。

○すがた：：いわれ。

○一念：：弥陀の本願のいわれを聞きひらいた最初の時。

○発願回向：：浄土往生を願う願をおこし回向すること。

○凡夫：：凡夫といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと。

〔一念多念文意〕

ち・弥陀如来みだにょらいの凡夫ぼんぶに回向えこうしましま

すこころなり、これを大經だいきようには、

令諸衆生りようしよじようく功德成就どくじようじゆと説とけり、さ

れば無始むし以来いらいつくりとつくる惡業あくごう煩惱ぼん

悩のうを、のころとともなく、願力がんりき不

思議しぎをもつて消滅しょうめつするいはれある

がゆゑに、正定聚しょうじようじゆ不退ふたいの位くらゐに住じゆう

すとなり、これによつて、煩惱ぼんのうを断だん

ぜずして、涅槃ねはんをうといへるはこの

こころなり、この義ぎは、当流とうりゆう一途いちずの

所談しよだんなるものなり、他流たりのうの人ひとに對たい

○回向：：自ら修めた善根功德を衆生にふり向けられることをいう。

○大經：：仏説無量壽經

○令諸衆生功德：：「諸の衆生をして功德成就せしむ」

○無始以来：：はるか昔より

○惡業：：苦の結果をまねく原因となる身・口・意（からだ・言葉・心）の行為。

○願力不思議：：人間の思慮分別を超えた弥陀の本願力。

○正定聚：：浄土に往生することが正しく定まり、必ずさとりを開いて仏に成ることが決定しているともがら。

○煩惱を断ぜず：：「正信偈」の「不断煩惱得涅槃」についている。

○涅槃：：すべての煩惱を滅したさとの境地をいう。仏

して、かくのごとく沙汰あるべから
ざるところなり、よくよく、こころ
うべきものなり、

あなかしこ あなかしこ

〈末代無智の章〉

末代無智の、在家止住の男女たら
んともがらは、こころをひとつにし
て、阿弥陀仏をふかくたのみまぬら
せて、さらに余のかたへこころをふ
らず、一心一向に仏たすけたまへと

教の究極的な実践目的である

○当流一途の所談：：浄土真宗だけが説くところの教え。

○他流の人：：浄土真宗以外を信じているの人。

○末代：：末世、末の世。正像・末の三時思想よりいえば末法の時代のこと。

○在家止住：：在家の生活をしてゐるもの。

○一心一向：：他の仏や余行に心をかけず、もっぱら阿弥陀仏を信ずること。

○たすけたまへ：：浄土真宗では、衆生が阿弥陀如来に向かつておたすけを請求する意

御文章

申さん衆生しゅじょうをば、たとひ罪業ざいごうは深じん
重じゅうなりとも、かならず弥陀如来みだにょらいはす
くひましますべし、これすなはち、
第十八の、念仏往生ねんぶつおうじょうの誓願せいがんのここ
ろなり、かくのごとく決定けつじょうしての
うへには、ねてもさめてもいのちの
あらんかぎりは、称名念仏しょうみょうねんぶつすべき
ものなり、あなかしこあなかしこ

〈聖人一流の章〉

聖人一流しょうにんいちりゅうの御勸化ごかんけのおもむきは、

ではなく、許諾（先方の言い分を許し承諾する）の義で、「必ずたすける」という本願招喚の勅命を領納して、仰せの通りに信順している信相をあらわす。

○あなかしこ……おそれ多く存じます、から転じて書簡の末尾におかれる慣用語。御文章では内容を強調し念をおす語として用いられている。

○聖人一流……ここでは浄土真宗を指す。

○勸化……人に仏道を勧めること。教化の意。
○雑行……雑は邪雑、雑多の

信心しんしんをもつて本ほんとせられ候そうろう、その

ゆゑは、もろもろの雜行ざうぎようをなげすて

て、一心いっしんに弥陀みだに歸命きみょうすれば、不可ふか

思議しぎの願力がんりきとして、仏ぶつのかたより往おう

生じやうは治定じじやうせしめたまふ、その位くらゐ

を、一念發起いちねんぽう入正定之聚きにゆうしやうじやうしじやうとも釈しゃく

し、そのうへの称名念仏しょうみょうねんぶつは、如来にょらい

わが往生おうじやうを定めたまひし、御恩報ごおんほう

尽じんの念仏ねんぶつと、こころうべきなり、

あなかしこ あなかしこ

意味で、お念仏以外の教えを信じ行ふこと。

○一心：：本願を信じて疑わず、二心のないこと。

○歸命：：心から信じうやまう意。

○願力：：一切衆生を救済しようという弥陀の本願に應じて成就された救済力のこと。

○往生：：阿弥陀仏の浄土に往き生れることをいう。

○治定：：ものごとが決定すること。

○一念發起：：疑いなき信心がおこること。

○入正定聚：：浄土に往生することが正しく定まり、必ずさとりを開いて仏に成ることが決定しているともがらに加わる。

〈白骨の章〉

それ、人間にんげんの浮生ふしようなる相さうを、つらつ
ら観かんずるに、おほよそはかなきもの
は、この世よの始中終しちゅうじゆう、まぼろしのご
とくなる一期いちごなり、さればいまだ万まん
歳さいの人身にんじんを受けたりといふことをき
かず、一生いっしょう過ぎやすし、いまにいた
ってたれか百年ひゃくねんの形体ぎようたいをたもつべ
きや、われや先人さきひとや先さき、今日きようともしら
ず明日あすともしらず、おくれさきだつ

○浮生なる相……人生の定め
のないありさまをいう。

○観ずるに……心をしずめて
おもうに。

○始中終……一生。始は少年
期、中は壮年期、終は老年期
をいう。

○一期……一生涯のこと。

○百年の形体……百歳の身体

○おくれさきだつ人……生き
残る人と死ぬ人。

○もとのしづくすゑの露……
草木の根もとにおちるしづく
草の葉の末にやどる露のこと
で、人の死の先後は予想でき
ないことをあらわす。

人は、もとのしづくすゑの露つゆよりも

しげしといへり、されば、朝あしたには紅こう

顔がんあつて、夕ゆうべには白骨はっこつとなれる身みな

り、すでに無常むじょうの風かぜきたりぬれば、

すなはちふたつのまなこたちまちに

閉とじ、ひとつの息いきながくたえぬれば、

紅顔こうがんむなしく変へんじて、桃李とうりのよそほ

ひを失うしなひぬるときは、六親眷属ろくしんけんぞくあ

つまつて、なげきかなしめども、さら

にその甲斐かいあるべからず、さてしも

あるべきことならねばとて、野やが外がいに

○しげし……数量が多い。

○桃李のよそほひ……桃や李
(すもも)のように美しいす
がた。

○六親眷属……父・母・兄・
弟・妻・子の六親と親類の者

○さてしも……いつまでもそ
うしてはいられないので。

おくって、夜半よわの煙けむりとなしはてぬ
れば、ただ白骨はっこつのみぞのこれり・あは
れといふもなかなかおろかなり、さ
れば、人間にんげんのはかなきことは、老少ろうしょう
不定ふじょうのさかひなれば、たれの人も、
はやく後生ごしょうの一大事いちだいじを心こころにかけて、
阿弥陀仏あみだぶつをふかくたのみまゐらせて
念仏ねんぶつ申すべきものなり。

あなかしこ あなかしこ

○おろかなり……言葉では表し尽せない。

○老少不定……人の寿命は年令に關係ないこと。

○さかひ……境界。

○後生の一大事……生死の問題を解決して後生に浄土に往生すること。

○念仏申す……「南無阿弥陀仏……」と口から声に出し称える。

法事を勤めるときのお仏壇のお荘厳と心得

年忌まいしきの法事を営むときは、報恩講ほうおんこうやお取越とりこそ同様に

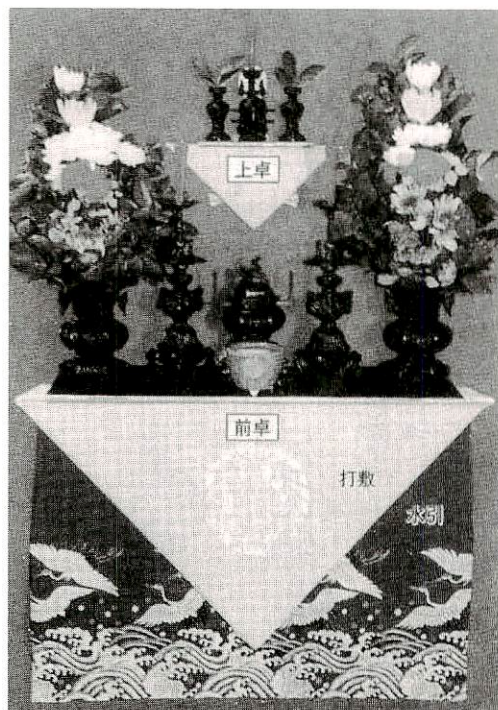
前卓まえしよくに打敷うちきを掛けます。

お飾りは五具足ごぐそく（ロウソク立て一対、お花立て一対、

金香炉きんかう）が正式です。

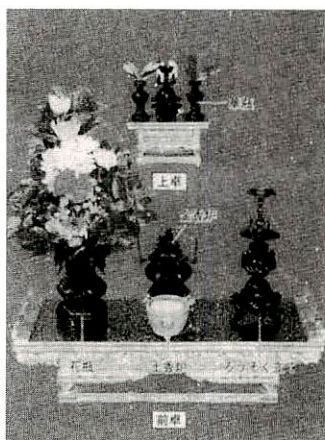
七回忌からは朱蟬しゅせん（赤色のローソク）をたてます。

仏壇の金箔や漆の為にも和ローソクを使いましょう。



報恩講・法事の五具足飾り

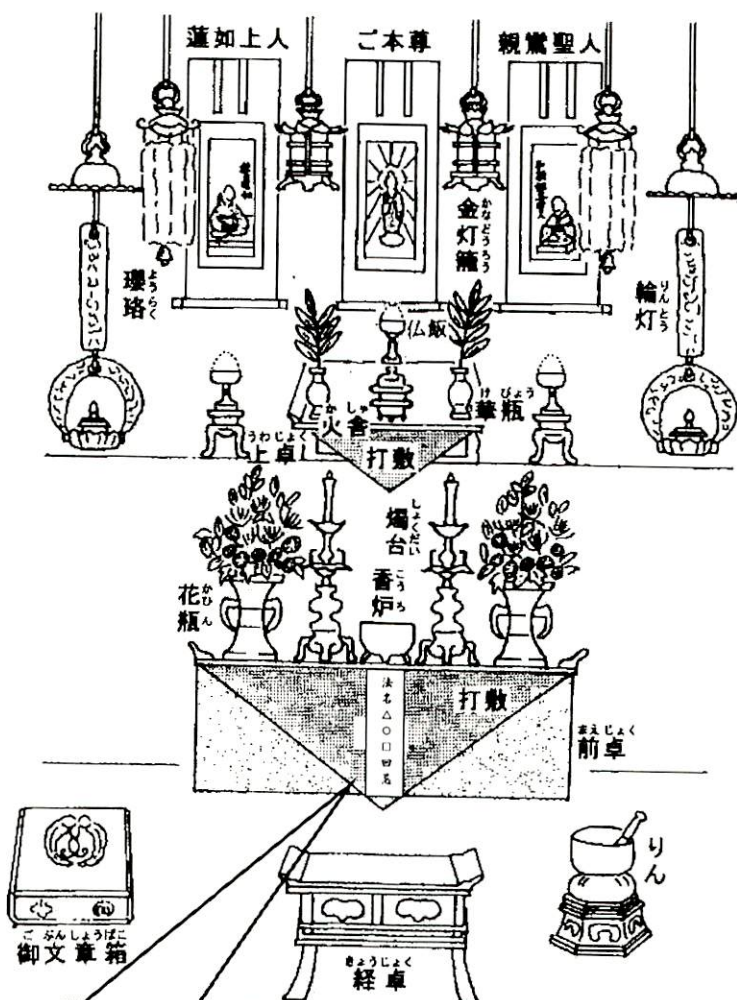
※お花はその季節のお花で構いません。ただし、トゲのある花や、不快な臭いを出す花、造花は立てないようにしましょう。



普段の三具足飾り

日常やお定飯じようはんの時は三具足みづぐ（ロウソク立て・花立・香炉が各一個）で打敷は掛けなくてもよい。

法事の時のお仏壇荘厳例



打敷の前に年忌法事を勤める方の法名の書かれたもの、お寺から配られた年忌案内札や過去帳あるいは繰出札を出しておきましょう。

おん ぞく さん
恩 徳 讃

親 鸞 聖 人 和 讃
清 水 脩 作 曲

おだやかに ♩=76
mp

によら—い だいひ—の おん どく は

mf

みを—こに して— も ほうず—べ し

p 次第に強く *f*

ししゅ— ちし—きの おん どく も —

f *p*

ほ—ねを くだきても しゃすべ し

ほ
ね
を
く
だ
き
て
も
謝
す
べ
し

師
主
知
識
の
恩
徳
も

身
を
粉
に
し
て
も
報
ず
べ
し

如
来
大
悲
の
恩
徳
は

恩
徳
讃

真宗宗歌

真宗各派協和会作詞
島崎赤太郎 作曲

心をこめて ♩-69

p *mf* *p* *mf* *f* *vmf*

1. ふ か き み の り に あ い ま つ る み
2. と わ の や み よ り す く わ れ し み
3. う み の う ち と の へ だ て な く み

の さ ち な に に た と う べ き ひ
の さ ち な に に く ら ぶ べ き ろ
お や の と く の と う ど き を わ

た す ら み ち を き き ひ ら き ま
く じ の み な を と な え つ つ よ
が は ら か に つ た え つ つ み

こ と の み ら む ね い た だ か ん
の な り わ い そ し ま ん
く に の た び を と も に せ ん

三、

二、

一、

浄土の旅を
わが同胞に
み仏の徳の
海の内外の
へだてなく
とうときを
つたえつつ
ともにせん

世の生業に
六字のみなを
身の幸な
とわの闇より
すくわれし
くらぶべき
となえつつ

まことのきむね
ひたすら道を
身の幸な
ふかきみ法に
あいまつる
ききひらき
たとうべき

真宗宗歌

み仏にいだかれて

日曜学校同人 作詞
野村 成仁 作曲

しみじみと ♩=44

1~4. み ほと - け に - い だか - れ て -

き み ゆ - き ぬ -

に し の - き し -
じ ひ の - く し -
は な の - さい -
た ま の - い え -

な み つ か く し き -
み つ せ け ろ -
う つ く し ぎ る -
き し せ け る -

お も か げ も -
み に か し て -
た の ほ み に -
み ほ と け -

き え は し て し -
し え め した す -
な み り ま し -
き え は し て し -

か か な し さ よ -
か う し こ さ よ -
と れ う し と さ よ -
と れ う し と さ よ -

(原曲はハ短調)

四、	三、	二、	一、
なりましし	きみゆきぬ	きみゆきぬ	きみゆきぬ
うつくしき	きみゆきぬ	きみゆきぬ	きみゆきぬ
宝楼閣	花の里	慈悲の国	西の岸
みほとけに	花の里	慈悲の国	西の岸
宝楼閣	花の里	慈悲の国	西の岸
みほとけと	花の里	慈悲の国	西の岸
とうとさよ	花の里	慈悲の国	西の岸

重誓偈

重誓偈

二打

我建超世願 斯願不滿足 我於無量劫 普濟諸貧苦 我至成仏道 究竟靡所聞 離欲深正念 志求無上道

同

必至無上道 誓不成正覺 不為大施主 誓不成正覺 名聲超十方 誓不成正覺 淨慧修梵行 為諸天人師

◎重誓偈は、『三誓偈』とも呼ばれ、『仏説無量壽經（大經）』の巻、四十八願が誓われた後すぐに説かれる讃歌です。法蔵菩薩が世自在王の前で四十八願の誓いの要旨を十一偈の歌詞として宣べられています。

わたしは世に超えすぐれた願をたてた。必ずこの上ないさとりを得よう。この願を果たしとげないようなら、誓って仏にはならない。わたしは限りなくいつまでも、大いなる恵みの主となり、力もなく苦しんでいるものをひろく救うことができないようなら、誓って仏にはならない。

わたしが仏のさとりを得たとき、その名はすべての世界に超えすぐれ、そのすみずみにまで届かないようなら、誓って仏にはならない。

欲を離れて心静かに、清らかな智慧をそなえて菩薩の修行に励み、この上ないさとりを求めて、天人や人々の師となろう。

願 がん 慧 ね 悉 しつ 成 じよう 満 まん	供 く 養 よう 一 いつ 切 さい 仏 ぶつ	常 じよう 於 お 大 たい 衆 しゆ 中 ちゆう	為 い 衆 しゆ 開 かい 法 ほう 蔵 ぞう	日 にち 月 がつ 戢 しゆう 重 じゆう 暉 き	功 こう 祚 そ 成 じよう 満 まん 足 ぞく	閉 へい 塞 そく 諸 しよ 惡 あく 道 どう	開 かい 彼 ひ 智 ち 慧 え 眼 げん	消 しよう 除 じよ 三 さん 垢 く 冥 みよう	神 じん 力 りき 演 えん 大 だい 光 こう
得 とく 為 い 三 さん 界 がい 雄 お	具 ぐ 足 そく 衆 しゆう 德 とく 本 ほん	説 せつ 法 ほう 師 し 子 し 吼 く	広 こう 施 せ 功 く 德 とく 宝 ほう	天 てん 光 こう 隱 おん 不 ふ 現 げん	威 い 曜 よう 朗 ろう 十 じつ 方 ぼう	通 つう 達 だつ 善 ぜん 趣 しゆ 門 もん	滅 めつ 此 し 昏 こん 盲 もう 闇 あん	広 こう 濟 さい 衆 しゆ 厄 やく 難 なん	普 ふ 照 しよう 無 む 際 さい 土 ど

不可思議な力で大いなる光を放ち、果てしない世界をくまなく照らして、煩惱の闇を除き去り、多くの苦しむものをひろく救いたい。智慧の眼を開いて無明の闇をなくし、迷いの世界の門を閉じて、さとの世界の門を開こう。すべての功德をそなえた仏となつて、そのすぐれた輝きはすべての世界に行きわたり、太陽も月もその光を奪われ、天人も輝きを隠すであろう。

人々のためにすべての教えを説き明かし、ひろく功德の宝を与えよう。

常に人々の中にあつて、獅子が吼えるように教えを説こう。

すべての仏がたを供養し、さまざまな功德をそなえ、願も智慧もそのすべてを満たし、世界中でもつともすぐれたものとなろう。

重誓偈

如^に仏^{ぶつ}無^む礙^げ智^ち

願^{がん}我^が功^く慧^え力^{りき}

斯^し願^{がん}若^に剋^{こつ}果^か

虚^こ空^く諸^{しよ}天^{てん}人^{にん}

南無阿弥陀仏^{なまんだぶ}

同
南無阿弥陀仏^{なまんだぶ} 南無阿弥陀仏^{なまんだぶ}

南無阿弥陀仏^{なまんだぶ} 南無阿弥陀仏^{なまんだぶ}

南無阿弥陀仏^{なまんだぶ}

通^{つう}達^{だつ}靡^み不^ふ照^{しょう}

等^{とう}此^し最^{さい}勝^{しょう}尊^{そん}

大^{だい}千^{せん}応^{おう}感^{かん}動^{どう}

当^{とう}雨^う珍^{ちん}妙^{みょう}華^け

一打

願^{がん}以^に此^し功^く徳^{どく}

同
平^び等^{よう}施^{どう}一^せ切^{いっさい}

同
同^{どう}発^{ほつ}菩^ぼ提^{だい}心^{しん}

同
往^{おう}生^{じょう}安^{あん}楽^{らく}国^{こく}

師の仏の何ものにもさまたげられない智慧がすべてを照らし尽くすように、願わくは、わたしの功德や智慧の力も、このもつともすぐれた仏のようでありたい。
この願いが果しとげられるなら、天も地もそれに応て打ち震え、空からはさまざまな天人が美しい花を降らすであろう。

領解文りょうげもん

もろもろのぞうぎよう雜行・ざっしやう雜修、じりき自力のころをふりすてて、
一心いっしんに阿弥陀如来あみだにょらい、われらが今度のいちだいじ一大事のごしやうおん後生御たすけ
そうらへとたのみまうしてそうろう。たのむいちねん一念のとき、
往生おうじやういちじやうおん一定御たすけじじやう治定と存じ、このうへのしやうみやう称名は、ご
恩報謝おんほうしゃと存じよろこびまうしそうろう。この御おんことわり
聴聞ちやうもん申しわけそうろうこと、ご開山かいさんしやうにん聖人しゆっせご出世おんのご恩、
次第相承しだいしやうじやうの善知識ぜんちしきのあさからざるご勸化かんけのご恩と、ありが
たく存じぞんそうろう。このうへはさだ定めおかせらるる御おんおきて、
一期いちごをかぎりまもりまうすべくそうろう。

へあとがき

この経本は法事でお勤めする三部経の意味が分かるよう現代語訳を対比させ編集してあります。また正信偈和讃では在家報恩講（お取越）でお勤めする五十六億和讃も掲載しています。この一冊には浄土真宗本願寺派の一般のお参りで必要な内容がほぼ盛り込まれています。

法事やお参りにご活用いただき、現代語と対比しながら、お念仏の味わいを一層深めていただければ幸いです。

なお、現代語訳は浄土真宗聖典編集委員会の『浄土三部経』現代語版、浄土真宗聖典普及会の『礼拝聖典』を参照させていただきました。

また、正信偈については岐阜教区揖斐組若院会のご厚意で、「報恩講おつとめ」の版下を使用させていただきます。厚く感謝いたします。

平成十四年 五月一日 改訂発行
平成二十九年 八月一日 第九版発行

編集発行 法事勤行集普及推進委員会

池本史朗	（法性寺）	石本龍憲	（浄光寺）
稲木義友	（観専寺）	大熊秀基	（専宗寺）
楠真	（縁覚寺）	小田嶋秀典	（影現寺）
西光義秀	（萬行寺）	佐竹知信	（正念寺）
佐藤知水	（光栄寺）	重松祐誠	（明蓮寺）
芝哲也	（光徳寺）	下野了爾	（光照寺）
菅祐範	（聖安寺）	杉坂英明	（大國寺）
鷺見真人	（覚勝寺）	鷺見充晃	（超宗寺）
竹中真瑞	（長福寺）	多田文樹	（演仙寺）
筑間達朗	（長宝寺）	徳岡健秀	（善明寺）
栃川常彰	（西光寺）	西崎智英	（西樂寺）
野村了嗣	（西光寺）	早間篤美	（長慶寺）
早川孝道	（善入寺）	松月博宣	（萬徳寺）
藤井章乗	（願寿寺）	八木益夫	（海徳寺）
水上誠孝	（林双寺）	驚岡護	（寶琳寺）
山田龍介	（教徳寺）		（正蓮寺）
滋賀教区愛知上組			

（事務局）岐阜県本巣市曾井中島五三 正尊寺内

代表 杉山 雲来

TEL 〇五八一三 四一〇一八
FAX 〇五八一三 四一〇一八
URL www.shosonji.or.jp

印刷 共和印刷株式会社

岐阜市折立柿添三七一一

